

## 「福音の継承を！」

大原教会 飯田敏幸



ペテロが言った、「金銀はわたしには無い。しかし、わたしにあるものをあげよう。ナザレ人イエス・キリストの名によって歩きなさい」。

使徒3・6

ペテロがここで差し出したのは、癒<sup>いや</sup>される人にとつての福音でしょう。この世的な何をもつてしても救えないことと、「イエス・キリスト」の名によってのみ救えることを知っているペテロは、福音を差し出したのです。

私たちの伝道は、知恵や知識による工夫、経験によるところが多いものです。これらは、様々な場面で役に立つことでしょう。

しかし、魂の救いは、福音によるものです。ですから、私たちがこの福音に生かされていることを子どもたちに示し、この福音を差し出すことが何より大切なのです。「あなたも、このキリストの名によって歩きなさい」と。

信仰の継承には、私たちの生き方（救い主に

信頼し、誠実に、真剣に生きているか）が問われます（もちろん、私も含めて）。すなわち、キリストの名によって生きていることを証しているか、ということです。

ペテロたちは、相手に必要な福音を差し出す前に、「彼をじっと見て、『わたしたちを見なさい』（4）と言います。それは、ペテロたちが、相手に期待させるほどの何か（福音）に自ら立て歩んできた、その姿を人々に見せられたからではないでしょうか（4）。

主は、私たちも、子どもたちに何か（福音）を期待させるほどに、福音に歩んでいる者としてください。そして、福音によって奉仕している姿を見せられる教会学校の奉仕者としてください。なぜなら、主は、ペテロたち同様、救われた私たちを福音によって歩ませ、福音を継承する者にならせたいと、心から期待しておられるからです。

教会の将来は、次世代への「福音」の継承によって描かれていきます。福音とは、イエス・キリストご自身です。信仰とは、この方と共に歩むことです。伝道とは、福音を人々に差し出すことです。私たちが、救いの恵みをいただいた福音の証し人として、主の尊いご奉仕に加えさせていただきましょう。

# 牧羊者

## 目次

巻頭言	1
目次	2
カリキュラム	3
カリキュラム解説	4
教師養成講座「教会学校のリバイバルを求めて」	5
受難・復活 $\blacktriangle 4/2 \sim 4/16 \blacktriangledown$	13
創造・墮落 $\blacktriangle 4/23 \sim 5/14 \blacktriangledown$	31
キリストの教え $\blacktriangle 5/21 \sim 6/25 \blacktriangledown$	55
牧羊ひろば（函館中央教会）	91
「牧羊者」のご購読・ご利用について	96
おわりに	96

### 〔凡例〕

1. 原語について：ギリシャ語は〔ギリ〕、ヘブル語は〔ヘ〕、アラム語は〔ア〕で表記しています。
2. 礼拝メッセージ例の最後の「さんび」の略記について  
 こ：「こどもさんびか」、こ改：「こどもさんびか改訂版」（以上、日本キリスト教出版局）、ホ：「教会学校・日曜学校 子どもさんびか」（日本ホーリネス教団出版局）、イン：「教会学校さんびか」（インマヌエル教会学校部）、ふ：「ふくいん子どもさんびか」、GS：「ふくいんこどもさんびか2 グローイング・ソング」（以上、日本児童福音伝道協会）、PW：「プレイズワールド」（リビングブレイズ）

神を信じる生涯

イザヤ 40・26

● 受難・復活

行事	テーマ	聖書	暗唱聖句
4月2日 進級式	世に勝つ者	ヨハネ 16・29～33	同 33節
9日 棕櫚の日	十字架による新しい絆	ヨハネ 19・23～30	同 27節
16日 イースター	見ないで信じる信仰	ヨハネ 20・24～29	同 29節

● 創造・墮落

行事	テーマ	聖書	暗唱聖句
4月23日	天地創造	創世記 1・1～11	同 1節
30日	罪の起源	創世記 2・15～7	同 2・17節
5月7日	罪の結果	創世記 3・6～19	ローマ 6・23節
14日 母の日	父と母とを敬え	出エジプト 20・12～17	同 12節

● キリストの教え

行事	テーマ	聖書	暗唱聖句
5月21日	さいわいな人	マタイ 5・1～12	同 3節
28日	地の塩・世の光	マタイ 5・13～16	同 14節
6月4日	天の父の愛	マタイ 5・43～48	同 45節
11日 ペンテコステ ・花の日	御霊の実	ガラテヤ 5・16～26	同 22・23節
18日 父の日	主の祈り	マタイ 6・7～13	同 10節
25日	人をさばく人	マタイ 7・1～5	同 1節

## 二〇一七年度 カリキュラム解説

今年度より、新しい三年カリキュラムが始まります。今回も、前回カリキュラムのリソース活用部分がかなり入っていますが、全体の三分の一程は、新たな個所を取りあげています。旧約聖書は三年かけて歴史順に学び、新約聖書は、各年、いずれかの福音書を中心にイエス様の生涯を一通り学ぶことができます。その他、行事や教会暦に合わせたカリキュラムも盛り込んでいます。また、今回のカリキュラムの特徴は、毎年のテーマに沿って、テーマに基づく単元を一つずつ入れていることです。以下、今年度カリキュラムについてご紹介致します。

なお、今年度カリキュラムや三年分の新カリキュラムは、教会教育室ホームページからダウンロードして頂けます。適時ご利用ください。

### ①旧約聖書

旧約聖書からの学びは、創世記から士師記までです。よく知られた箇所が多いですが、その分、信仰生活の基本を教えることのできる部分でもあります。

### ②新約聖書

新約聖書は、マタイによる福音書を中心に学びます。「キリストの教え」「キリストのみわざ」、「キリストの譬話」に続き、「クリスマス」単元をはさんで、「キリストの十字架への道」へとつながります。

### ③教会暦・年間行事によるカリキュラム

昨年度末の単元「十字架への道」に続き、今年度初めには、受難週・イースターに合わせて、単元「受難・復活」が置かれます。年末からは、収穫感謝の日に続いて、単元「クリスマス」「年末・年始」と続きます。年度末には再び受難週を迎える形です。

### ④テーマ「神を信じる生涯」(イザヤ40・26)

今年度のテーマとしては、「神を信じる生涯」としました。創世記の学びを通して、創造者なる神を覚えることができます。加えて、7月には「神」というテーマ単元を設けました。神様がどんなお方であるのか、改めて確認しながら、神様への信仰が培われ、深められていく一年となりますように。

# 「教会学校のリバイバルを求めて」

神戸大石教会 金井 望



## 第二章 日本伝道の障壁

### 第一節 大正・昭和初期のリバイバル

筆者が牧会している神戸大石教会では、毎月CS教師会で教科書を用いて学習をしています。『実を結ぶ教会学校』（改訂版）と『救霊の動力』（旧版）をこれまで少しずつ読んできました。昨年5月に『救霊の動力』の新版が発行されたので、水曜日の聖書研究祈祷会でも、これを少しずつ学んでいます。筆者は大学生の頃からこれを座右の書として何度も読んできましたが、読むたびに深く教えられ、心を奮い立たせられます。

奇しくも神戸大石教会は、ウィルクス師が昭和6年（一九三一年）に日本で（最後に力を打ち込んだ伝道）、神戸・春日野の天幕伝道によって生まれた群れです（E・W・ゴズデン著『燃える心の使徒バゼット・ウィルクス』116頁）。その群れを長年守り育てた堀江博牧師は、児童伝道において用いられた器でした。堀江師が発行していた児童伝道新聞『みつかひ』と『おさなご』は教派を超えて広く用いられました。

大正時代から昭和初期にかけて日本伝道隊の宣教は、著しく発展しました。大正4年（一九一五年）に開館した湊川伝道館では、最初の半年間で85名の受洗者が与えられました（『日本伝道隊百年史』49～50頁）。大正13年には、御影聖書学舎（現在の関西聖書神学校）が創立さ

れ、湊川伝道館ではこの年60名以上の受洗者が与えられました。筆者の祖父・濱口龍太郎もその一人でした。濱口の夫婦は、堀江師のご協力により神戸・加納町の自宅で児童伝道に励んでいました。

聖書学舎が塩屋の新校舎に移転した昭和5年には、湊川伝道館で100名以上の受洗者が与えられました。この大正・昭和初期に降った聖霊の火は、全国に拡大する「前進運動」となり、それによって生まれた群れの一部が昭和10年に「日本イエス・キリスト教会」となりました。日本イエス・キリスト教団の前身です。

## 第二節 救霊の研究

『救霊の動力』は、ウィルクス師が〈若い宣教師の日本人伝道を助けるために書いた〉教科書ですが、豊富な経験に裏付けられており、日本人のキリスト者にとって、これに勝る日本伝道の指南書は無いと思います。

〈多くの人は、どのような分野であっても、注意深くかつ念入りの研究が成功に欠かせないことを心得ている。しかし、こと救霊の学問となると、ただ神学上の知

識や、行き当たりばったりの散漫な研究によって習得できると思っているようである。もちろん、このような考え方では失敗に終わらざるをえない。異教国においてはきわめて難しい仕事であろうが、やり遂げられねばならない（新版48頁）。ウィルクス師の忠告は今も有効です。

今日、キリスト教徒は、世界人口のおよそ3分の1を占めています。世界一の経済大国である米国では、キリスト教徒が人口の7割を占め、週に1回以上教会に行く人が5割近くいます。韓国では人口のおよそ3分の1がキリスト教徒です。中国は共産党の支配する国ですが、国家公認の教会だけでも六千万人以上、非公認の教会を加えれば一億人以上のキリスト教徒がいるようです。

ところが、日本ではキリスト教徒は人口の1パーセントしかいません。なぜ日本は、これほどキリスト教徒が少ないのでしょうか。大正・昭和初期の宣教の勢いは、なぜ続かなかったのでしょうか。

## 第三節 異教国日本

ウィルクス師は、日本が「異教国」であることについて

て注意深くあるように、と勧めています。

〈異教国に住む者は神を知らない。(中略) 日本では、神とは、祭り上げられた偉人にすぎない〉(同73頁)。

〈人の心は非常に暗くされている。このことを悟っていただきたい〉(同83頁)。

〈異教徒の理性にある無知について可能な限り深く意識しておくことは非常に重要である。(中略) 彼らは今も知らないし、今までも知らなかった。(中略) わたしたちが語りかけている人々は神の存在と善意と力についての初歩的な概念さえもっていない〉(同84頁)。

日本に最初に來た宣教師フランシスコ・ザビエルも一五五二年に書いた手紙で、ウィルクス師と同様のことを述べています。

〈日本の宗教は世界の創造について、つまり太陽や天や地や海などについて何も教えていません。ですから日本人はそういうものが自然に生まれてきたとばかり思っています。靈魂の創造者であり同時に父である方がたった一人おられ、万物はその方が創造されたのだということを書いて彼らはびっくりしてしまいました。どうしてそんなに驚いたかという、彼らの宗教の伝承では宇宙

の創造主についてひと言も触れていないからです〉(ピーター・ミルワード著、松本たま訳『ザビエルの見た日本』講談社学術文庫、87頁)。

ザビエルは最初、ラテン語とポルトガル語の Deus (デウス) を「大日」と訳しました。ところが「大日」が密教の奉ずる「大日如来」を指すことがわかると、これを撤回し、ラテン語そのままに「デウス」を用いることを主張しました。

## 第四節 カミ・神・GOOD

『広辞苑』(第5版、岩波書店) には「神(かみ)」について次のように書かれています。

①人間を超越した威力を持つ、かくれた存在。人知を以てはかることのできない能力を持ち、人類に禍福を降すと考えられる威霊。人間が畏怖し、また信仰の対象とするもの。②日本の神話に登場する人格神。③最高の支配者。天皇。④神社などに奉祀される霊。⑤人間に危害を及ぼし、怖れられているもの。⑥キリスト教で、宇宙を創造して支配する、全知全能の絶対者。上帝。天帝)。

キリスト教の伝来以前には、「宇宙を創造して支配する、全知全能の絶対者」という概念が無かったのです。

江戸時代の国学者、本居宣長は「古事記伝」で次のように述べています。〈何にまれ、尋常ならず、すぐれたる徳のありて、可畏（かしこ）きものをカミと云ふ也〉。

すなわち、古代日本においては、畏怖の対象となるものは何でも、「カミ」であつたのです。それは人格的存在に限りません。雷や狐、狼、蛇、樹木、岩、泉、山、海であつたりします。古代日本人にとって「カミ」は自然に感じられる神秘的な力に過ぎず、森羅万象のすべて、自然そのものが「カミ」であつたのです。

神道の基底には、すべてのものに「タマ」（靈魂）が宿っているとするアニミズムがあります。「カミ」と「タマ」は、ほとんど同義でした。そこから、自然崇拜が生まれ、祖霊崇拜が生まれました。

紀元前3世紀頃に、日本列島でも水田稲作の農耕社会が成立しました。これは大陸からの渡来人が生み出した新しい社会です。それに伴って、農耕儀礼を中心とした宗教が現れました。神憑り状態<sup>カミ</sup>になって超自然的存在<sup>カミ</sup>神、精霊、死者等と交流を行うシャーマニズムが大陸か

ら伝わって、これに呪術的要素が加わりました。

紀元3世紀に近畿地方では、有力な豪族の連合によるヤマト王権が成立しました。そして、その王の権威を確立するために、神話と儀礼が整えられていきました。ヤマト王権は、大陸のシャーマニズムの影響を受けて、天に在る神々を祭り、オホキミ（天皇）は天の神アマテラスオホミカミ（天照大神）の子孫であるとして、垂直的な思考と社会的関係を確立したのです。

ヤマト王権は各地に、天皇の祖先を祀る神社と共に、征服した豪族を祀る神社も建てました。こうして水平的思考と垂直的思考が交錯したことから、神道の世界観は複雑化し、多様な神々を数知れず生み出していきました。

## 第五節 伴天連追放と帝国主義

日本伝道には歴史的に3回、大きなチャレンジがあつたと言われます。最初は一五四九年のフランシスコ・ザビエル（イエズス会宣教師）の来日から始まったキリシタンの時代です。それからおよそ100年の間に日本に來た宣教師がおよそ300名いました。各地の大名は、ポルトガ



ルとの貿易が利益をもたらしたため、宣教師を歓迎し、自らキリシタンとなる者もいました。17世紀初頭にはキリシタンの数は70万人以上に増加しました。

天下人・豊臣秀吉は一五八七年6月18日に伴天連（宣教師）追放令を發布しました。これには、ポルトガル商人による日本人奴隷の売買を禁じた規定があります。

「大唐、南蛮、高麗え日本仁を売遣候事曲事。付、日本におゐて人之売買停止之事。右之条々、堅く停止せられおはんぬ、若違犯之族之あらば、忽厳科に処せらるべき者也」（伊勢神宮文庫所蔵「御朱印師職古格」）。

豊臣秀吉がバテレンを追放したのは、ポルトガルやスペインによって日本が侵略されて、日本人が奴隷として海外に売られる恐れがあったからです。

欧州の列強によるアフリカ、アジア、南北アメリカ、オセアニアの侵略と植民地支配が始まったのは、15世紀です。それを是認したのはローマ教皇庁でした。

## 第六節 壇家制度と五人組

キリシタンは封建秩序を脅かす存在だ、と江戸幕府は

考えて、禁教政策を行いました。江戸幕府は初期には、朱印船貿易を盛んに行っていました。欧州列強の侵略を恐れて、鎖国に転じました。烈しい迫害によって殉教したキリシタンの数は、20〜30万人とも言われます。

幕府は、すべての家にいずれかの仏教寺院の檀家となることを強制し、寺院に檀家がキリシタンでないことを証明する宗旨人別帳を作らせ、仏壇の無い家は邪宗門として告発させました。そして、民衆がキリシタンにならぬよう相互に監視するシステム「五人組」を組織しました。檀家制度と五人組の影響は今でも残っています。

## 第七節 カクレキリシタン

江戸幕府によってキリシタンが禁教とされた後も230年間、潜伏キリシタンはオラシヨ（祈祷）を口伝えで継承しました。しかし、その意味は失われてしまいました。

明治維新によってキリシタン禁教令が解かれた後も、ローマ・カトリック教会に戻らないで、独自の信仰を守った人たちがいます。それがカクレキリシタンです。今でも長崎県の五島地方と外海地方、生月島にはカクレキリ

シタンが千人ほどこいます。

彼らは掛軸に表装した、日本的な姿をしたキリスト、マリヤ、諸聖人、殉教者などを描いた「御前様」を崇拜し、すでに意味内容が失われたオラシヨ（祈祷文）を呪文のように唱えています。

生月島のオラシヨには「神寄せ」があり、50体あまりの神様をお呼びするといひます。ミサの代わりに御神酒おみきと刺身が出されます。彼らが呼びかけるデウス、ゼスキリスト、サンタマリヤなどがいかなる存在か、理解はほとんどありません。彼らの宗教はもはやキリスト教とはいえないものです。

遠藤周作は小説『沈黙』の中で重要な問題提起をしています。この小説の中で、元・イエズス会宣教師フェレイラ（棄教して沢野忠庵と改名）は次のように語っています（新潮文庫190～193頁抜粋）。

「この国の者たちがあの頃信じたものは我々の神ではない。彼等の神々だった。それを私たちは長い長い間知らず、日本人が基督教徒になったと思ひこんでいた。

基督教の神は日本人の心情の中で、いつか神としての実体を失っていった。

日本人はこれまで神の概念はもたなかったし、これらもてないだろう。日本人は人間とは全く隔絶した神を考へる能力をもてない。日本人は人間を超えた存在を考へる力も持てない。

日本人は人間を美化したり拡張したものを神とよぶ。人間と同じ存在をもつものを神とよぶ。だがそれは教会の神ではない。

私にはだから、布教の意味はなくなつていった。たゞさえてきた苗はこの日本とよぶ沼地でいつの間にか根も腐つていった。私はながい間、それに気づきもせず知りもしなかつた。

切支丹が亡びたのはな、お前が考へるように禁制のせいでも、迫害のせいでもない。この国にはな、どうしても基督教を受けつけぬ何かがあつたのだ。」

## 第八節 復古神道と国家神道

江戸中期以降、日本の古典を研究し、純日本精神を追究する国学が発達する中で、日本固有の神道を復元しようとする動きが起りました（復古神道）。本居宣長

とその弟子・平田篤胤が中心人物です。

平田はキリスト教を研究し、それを神道に応用して、彼の神学＝平田神道を形成しました。平田の没後、復古神道の信奉者が激増し、これが尊王攘夷・明治維新の原動力になりました。

明治維新によって、天皇を現人神とする国家神道が、大日本帝国の中心的な原理となりました。それが大正時代を経て、昭和20年の終戦まで続きました。

## 第九節 キリスト教の解禁と迫害

幕末にカトリック教会は、朝鮮と琉球で日本への再進出の準備を進め、開国後直ちに宣教師が来日しました。明治政府は欧米諸国との交流を進めるため、キリスト教を解禁しました。プロテスタントの宣教師も続々来日し、各地に教会や学校を建てて宣教しました。聖書と訳の事業が盛んに行われました。

しかし、ドイツを中心として欧米に広がった新神学（自由主義神学）が、一八八九（明治22）年頃から日本の牧師や信徒に広がり、福音主義の信仰を損ねていきました。

これは、科学を信頼して、超自然的な聖書の記述を認めず、歴史的な信条を告白しない立場・運動です。

バークレー・バックストン師が英国から純粋な福音主義の「活ける水」「燃える炎」を持って来日したのは、ちょうどその最中、一八九〇（明治23）年です。

その後、日本人の中から無教会派の内村鑑三やクエーカーの新渡戸稲造、救世軍の山室軍平、長老派の賀川豊彦など、社会に大きなインパクトを与える指導者が輩出しました。

一九四一（昭和16）年6月に、政府の政策によって日本のほとんどの教会が「日本基督教団」に統合され、戦争に協力することとなりました。教会でも御真影（天皇の肖像写真や肖像画）が掲げられ、宮城遙拝が為されました。

日本が米国や英国と戦った太平洋戦争の時代には、キリスト教は敵性宗教と見なされ、キリスト者は迫害を受けました。特に朝鮮での迫害は激しいものでした。本土でもホーリネス教会の牧師等が戦時中に弾圧されて、殉教する者が出ました。

## 第一〇節 進化論・唯物論・世俗化

一九四五（昭和20）年8月に、日本が米国を中心とする連合国に降伏して、太平洋戦争は終結しました。戦後、進駐軍GHQが主導した改革によって、天皇は人間宣言をなされ、主権在民の民主主義を基本とする日本国憲法が制定されました。憲法によって信教の自由が保障されました。

戦後しばらくの間、欧米から大勢の宣教師が来日して、教会に大勢の人が集まりました。しかし、キリスト教ブームはやがて沈静化しました。

戦後教育によって、進化論と唯物論の世界観が、日本人に浸透しました。「科学は万能であり、技術革新が豊かな生活をもたらす」と信じる楽観的な科学信仰と進歩主義が蔓延しました。

日本のプロテスタント主流派では、日米安保体制に反対する社会派の運動が盛んになりました。

高度経済成長によって日本は世界でトップクラスの経済大国となり、プラグマティズム（実用主義）と拝金主義が日本人に浸透しました（世俗化）。

## 第二一節 カルト問題・宗教多元主義

一九六〇年代後半にアメリカの若者に広がったカウンターカルチャー（反体制的な対抗文化）の一部で、七〇年代以降、ニューエイジ的な新興宗教が盛んになり、「スピリチュアル」なものが流行しました。

日本では、オウム真理教が、一九八九年11月に坂本弁護士一家殺害事件、一九九四年6月に松本サリン事件、一九九五年3月に地下鉄サリン事件を起こして、世界を震撼させました。これによって、多くの日本人が、「宗教は怖い」というイメージを、持つようになりました。

ポストモダンの現代では「絶対」が否定され、一神教に反対する宗教多元主義が強くなりました。「宗教の違いは、同じ山を違う道から登っているようなものだ。結局、行き着く先は同じだ」というのです。

本当でしょうか？ キリストは仰せになりました。

「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のもとに来ることはありません」（ヨハネ14・6 新改訳）。

伝道の障壁の突破について次回、学びましょう。

# 聖書 ヨハネ16・29～33 テーマ 世に勝つ者

序論

(石田高保)

今日の個所は、最後の晩餐の席で、イエス様が最後に語られた言葉で、残して行く弟子たちに、最も励ましとなった内容です。「わたしはすでに世に勝っている」とは、何を意味するのでしょうか。世を征服してしまったとも訳せません。完了形で書かれているので、イエス様の取られた勝利が、現在までずっと続いている、効力がある、モノを言っている、21世紀の私たちにまで及んでいるということになります。「世」とは私たちを誘惑し、神から引き離す力のこととて、人、もの、お金、地位、遊びなどなどを指します。しかし「光はやみの中に輝いている。そして、やみはこれに勝たなかった」(1・5)。

## 一、地上の生涯に勝利された

「あなたがたはこの世ではなやみがある」、イエス様はクリスチャンの生活から悩みとなる出来事を何もかも取り除くことはなさいません。私たちは周りの状況を変えられませんが、こちらの対応は変えることができます。それはま

た人間の側の責任でもあります。

つまり悩みを悩みとして放置するのではなく、それを平安に変える道があるということです。「これらのことをあなたがたに話したのは、わたしにあつて平安を得るためである」、イエス様が弟子たちにいちばん与えようとしたものは、ご自身の平安でした。それをいただくためには、イエス様の勝利を自分の生き方に当てはめることです。たとえば野球のファンは、そのチームの勝ち負けと一体のところがあります。相撲のファンは、ひいきの関取の勝ち負けと一体です。それとは次元が違います、私たちは負け知らずのイエス様と分かちがたく一体になっています。ですからイエス様の勝利は、私たちの勝利となるのです。

「主ご自身、試練を受けて苦しまれたからこそ、試練の中にある者たちを助けることができるのである」(ヘブル2・18)、イエス様は私たちの受ける試みも、痛みも、悲しみも体験してくださいました。その中で罪に陥ることなく、悪魔の誘惑にも全戦全勝されました。「だが、彼(この世の君)はわたしに対して、なんの力もない」(14・30)とあるとおりです。誰か私たちの代わりに人生を生きてくれる人がいるでしょうか。そんな人はいません。しかし私たちができ

なかった完全な生き方を、イエス様は代わりにやり抜いてくださいました。わたしの人生を踏み直してくださいましたのです。私たちのどのような過去がイエス様によって踏み直されているのか、具体的に黙想してみてもはどうでしょうか。

## 二、十字架において勝利された

ほとんどの人にとって死は生涯の終わりではなく、それが人生の完成とか勝利であるという発想は持ちにくいでしょう。しかしイエス様は死ぬことによって、その生涯を完成されました。十字架に掛かって「すべてが終った」と言われましたが、これは「完了した、成就した、完成した」という意味です。私たちの罪の贖い<sup>あがな</sup>、つまり救いがあの十字架上で完成しています。イエス様は人類をことごとく死に追いやるための罪を、十字架に掛かることによって贖ってくださいました。このことを一度でも受け入れるならば、これまで犯してきた罪はまったく帳消しとなり、罪責感に悩まされることはなくなります。十字架の死において罪に勝利されたわけです。主の十字架によって赦されない罪はないのです。

## 三、復活によって勝利された

イエス様が十字架に死んで墓に葬られ、三日目に復活さ

れた時、何が起こったのでしょうか。人類共通の敵である死を打ち破り、これに勝利してくださいましたのです。「死は勝利にのまれてしまった。∴死よ、おまえのとげは、どこにあるのか」(1コリント15・55)、イエス様は復活によって死の恐怖というとげを抜いてしまわれました。クリスチャンにとって死ぬことは敗北ではなく、地上の生涯の完成であり、天国への花道でさえあります。主と共に迎える死は、まさに勝利なのです。

## 結論

「すべて神から生れた者は、世に勝つからである。そして、わたしたちの信仰こそ、世に勝たしめた勝利の力である。世に勝つ者はだれか。イエスを神の子と信じる者ではないか」(1ヨハネ5・4・5)、主の勝利は、そのまま私たちの勝利ですから、たとえ世に負けているように見える状況でも、私たちは主にあつて勝利者なのです。短期的には負けているようであつても、主により頼む人は長期的には世に勝つのです。「主よ、あなたの勝利は、わたしの勝利です!」と宣言し、死にも勝利しているイエス様を、人生の主としてより頼み続けましょう。



## 研究資料

(小平徳行)

この箇所は「告別説教」の結びである。この説教では特にイエスの死と復活について語られており、これは神の救いのご計画における最も重要な時といえる。この贖<sup>あがな</sup>いのわざこそ、すべてを新しくするものであり、イエスはそれを先取りして勝利を宣言されたのである。

## テキスト

29〜30 今はあからさまにお話しになって この時弟子たちは、イエスが25節で言われた言葉を用いて、今はイエスが語られていることは、はっきり理解できると言った。理解が進んだことは事実であるが、これは彼らの理解がまだ不完全であることを示すものであった。比喩(ギバロイミア) 元来「ことわざ」「深い意味をたたえている知恵の言葉」という意味である。新約聖書では4回だけ用いられている(他にはヨハネ10・6、16・25、Ⅱペテロ2・22)。イエスの言葉は聞く人にとっては理解できない謎であった。わたしたちはあなたが神からこられたかたであると信じます ここに弟子たちの信仰告白がなされている。彼らは、イエスが霊的洞察力をもつ

ており、自分たちの心の中を見通しておられることに感銘し(16・19)、そのような超自然的洞察力ゆえに、イエスが神からこられたお方であると信じたのであろう。彼らは自分たちが適切な信仰告白をしていると思つてゐるが実はそうではなかった。イエスが神から遣わされてこられたかたであることは信じているが、イエスがこの世を去れることについては触れていない。弟子たちはイエスが神の栄光を表わすためには、イエスが死んでこの世を去ることが必要であることは、まだ理解できなかったのである。弟子たちは自分たちが理解していないことが分からないほど、少ししか理解していなかった。「あからさまに」なるには「時」がある。それはイエスの復活、昇天によって、彼らに真理の御霊が与えられ、神との愛の交わりに導かれる時である。その時、もはや謎としてではなく明白な真理として理解できるようになる(16・12〜15)。

31〜32 ここでイエスは有頂天になっている弟子たちを戒め、その信仰の不完全さを指摘している。それは間もなく直面する試練に揺るがされてしまう弱さをもった信仰であった。あなたがたは今信じているのか これは一

つは、イエスが神から遣わされたお方であることを「今」やつと信じるのか、ということであり、もう一つは、これから起こることに關しては「今」もう信じているのか、という二重の意味を持つ。あなたがたは散らされて、それぞれ自分の家に帰り、わたしをひとりだけ残す時が来るであろう。イエスはご自分の逮捕、処刑に際して、弟子たちがご自分を見捨ててであろうことを予告された。これはイエスの死に対する弟子たちの認識、理解が欠如している事を際立たせるものであった。迫害は信仰の試金石である。しかし、イエスはゲッセマネの園でご自分を捕縛しに來た者たちに対し、弟子たちを去らせるように命じておられる。イエスは弟子たちの弱さを知った上で、細やかな配慮をもって最後まで愛し通された(13・1)。しかし、わたしはひとりではない。父がわたしと一緒におられるのである。イエスの受難は御父が共におられるという確信によって支えられていた。それだけに、十字架において御父の愛から見放されたことは、どれほど耐えがたい苦しみであったらうか。しかし最後には平安のうちにご自身の霊を御手にゆだねられた(ルカ23・46)。

33 わたしにあって平安を得るためである 平安こそイエスが与える決定的な賜物である。それはこの世が与えるものとは違う(14・27)。イエスとの關係によって弟子たちは、やがて迫害に直面する時でさえ平安であることが可能となる(16・2参照)。あなたがたは、この世ではなやみがある。ここでイエスは、弟子たちがこの世にある限り、苦難に直面する事は避けられないことを予告している。なやみ(ギ)スリシス 「苦難」の意味であるが、これは産みの苦しみに他ならない(16・21)。つまり後には必ずこの苦しみから解放され、それを忘れさせる喜びが待っているのである。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている イエスは目前に迫る受難と死の前にして、それが御父のご計画の成就であることを確信して、既に勝ち取られたものとして勝利を宣言している。勇気を出すことができるのは勝利の確信があるからである。平安の根柢はイエスの勝利にある。こうしてイエスの告別説教は勝利の宣言で結ばれる。

参考図書 村瀬俊夫「ヨハネの福音書」『新聖書註解・新約1』(いのちのことば社)、「ヨハネ伝講義下」高橋三郎(待晨堂) 他。



## 聖書

ヨハネ16・29～33

## タイトル

イエス様によって、勇気百倍！

## 暗唱聖句

あなたがたは、この世ではなやみがある。

しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている。

ヨハネ16・33

## 目標

キリストにあつて、世の困難を乗り越える勇気を持つ。

## 導入

(和田 治)

「やったあー！ ついに優勝したあー！」ずっと大ファ  
ンで応援してきたプロ野球チームが、初めて優勝したこと  
が、勝君は自分の事のように嬉しくて大はしゃぎでした！  
皆さんには、応援している野球チームやサッカーチーム、  
あるいは、おすもうさんや運動選手などがありますか？  
そのチームや選手が勝てば、もう、自分自身の勝利と同じ  
くらい喜びが爆発しますよね！ 今日、すでに世に勝つ  
ておられるイエス様の勝利は、私たちに本当の勝利を与え  
てくれるんだ！ ってことを学びますよ！

## 最後の晩餐の席で

「あなたがたは心を騒がせてはなりません。神を信じな

さい、そして私を信じるのですよ」。イエス様は恐れてい  
る弟子たちにおっしゃいました。いよいよイエス様が十字  
架にかかられる前の晩、最後のお食事の席でのことでした。  
イエス様のお話が締めくくられようとするとき、力強くこ  
う言われたのです。「あなたがたは、この世ではなやみが  
ある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に  
勝っている！」ちよつと待って！ イエス様は、これから  
ご自分に起ころうとしている恐ろしいできごとを、全部前  
もって知っておられたのですよ。なのに、こんなに勇気  
に満ち溢れておられるなんて、すごい！ では、このお言  
葉にはどんな意味があつたのでしょうか？

## 悩みがあつても大丈夫

イエス様は弟子たちに、「私を信じていれば、もうこの世  
で悩みなど一つもなくなります」とはおっしゃいませんで  
した。むしろ「この世では悩みがある」とはつきりおっ  
しゃつたのですね。続いて「しかし、勇気を出しなさい！  
」って励まして下さいました。イエス様は、どんなこと  
があつても揺るぐことが無い、イエス様ご自身の「平安」  
を、信じる私たちに下さるのです！ 「わたしはあなたが  
たに、わたしの平安を与えよう。それはこの世が与える、

はかない平安とは比べものになりません。だから、どんな時にも恐れなくて良いのですよ」と！ どうしてイエス様は私たちに平安をお与えになることが出来るのでしょうか。それは、イエス様ご自身が、十字架で、ものすごく大きな苦しみを通られたからです。こんな言葉があります。「主」ご自身、試練を受けて苦しまれたからこそ、試練の中にある者たちを助けることができるのである」。そうです！ イエス様なら、私たちがどんなに痛く、寂しく、悲しく、みじめで、死にたいくらいに辛くても、その苦しみを分かち合ってください、必ず助けて下さいます！ そのことを知ってイエス様に頼るなら、勇気百倍！ 悩みがあっても絶対に大丈夫なんですよ！

### 「わたしはすでに世に勝っている」

イエス様がおっしゃる「世」ってなんでしょうか。私たちを誘惑して、神様から引き離す力のことです。ある人にとっては「ゲーム」かもしれないし、またある人にとっては「お金」かもしれない。もしかすると、「やめなきゃな」と思っているけれども、どうしてもやめられないってこと、ありませんか？ イエス様は「わたしはすでに世に勝っている」っておっしゃいましたね。だから、イエス様を信じ

ている私たちは、世に勝つことが出来るのですよ！ み言葉の通り、心から信じましょう！

### 「十字架と復活」による勝利

イエス様は十字架の上で「すべてが終わった」とおっしゃいました。私たちの罪の罰を、イエス様が全部引き受けて下さったということです。イエス様を信じるなら、どんな罪でも全く帳消しにしていただけののです。十字架で死なれたイエス様は三日目に復活されました。死にさえも勝利されたのですから、その勝利は完全です！

### まとめ

友だちにいやなことをされたり、悪いことに誘われたり、時には先生や家族からさえ、辛い仕打ちを受けるかもしれません。そんな時、イエス様に「助けて！」って祈ろう！ 「勇気を出しなさい」とおっしゃるイエス様が、本当に勇気をくださいますよ！ そして、皆さんの中に、これまで「世」の力に負けてしまっていたなうって気づかされた人がいるかもしれません。その人は今、お祈りしませんか？ 罪を悔い改め、これからは勝利できるように…。イエス様がそうしてください！

♪主のパワー♪ (GS 36)

# 聖書 ヨハネ19・23～30 テーマ 十字架による新しい絆

## 序論

(石田高保)

十字架の周りには様々な立場の人がいました。祭司長たちのような反対者、兵卒たちのような無関心な人、女性の弟子たちのような主を愛する人。主はそれぞれの人々に深い関心と愛を向けておられ、最後の一息まで人を愛することをやめなさいませんでした。

## 一、無関心な人々

イエス様はクリスマスに地上に降る前、天においてはどのような状態でおられたのでしょうか。それは神の子として父なる神と一体となって人類の歴史を導いておられました。神の栄光がイエス様を包み、無数の天使たちが仕えていました。全知全能の主が人間となると、神の子として持っていた至高の位も栄光もあえて投げ捨て、丸裸で生まれてくださいました。では地上の生涯を終えるときはどうであったでしょうか。(23、24)にあるように、僅かな所有物であった着る物でさえ、みな剥ぎ取られてしまわれました。「主は富んでおられたのに、

あなたがたのために貧しくなられた。それは、あなたがたが、彼の貧しさによって富む者になるためである」(Ⅱコリント8・9)、私たちを霊的に富む者とするため、永遠の命を与えるために、主はあえて貧しい者、自分の命を捨てる者になって下さいました。

イエス様を十字架につけた兵卒たちは、何に関心を向けているのでしょうか。彼らはイエス様の着ていた物にしか関心がありませんでした。あろうことかそれで賭け事に興じていました。人類の歴史において、人間の救いにおいて最も重大な出来事であったにもかかわらず、そして最も近くにいたにもかかわらず、イエス様に目を向けるところか、この世のことに夢中になっていたわけです。これはまたイエス様を信じる前の私たちの姿でもあるのではないのでしょうか。救いはすぐ近くにあるのに人々には知らないだけなのです。無関心なのは、本当のことを知らないだけなのです。何とかして身近な人から始めてイエス様のことを知らせたい。そんな彼らのことも主は無関心ではなく、「父よ、彼らをおゆるしください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」(ルカ23・34)と祈っておられます。主が息を引き取られたとき、

彼らの隊長だけは「まことに、この人は神の子であった」（マルコ15・39）と言って、イエス様の本当の姿を悟っています。主は無関心な人々のことも諦めずに祈り、愛し続けられたわけです。

## 二、主を愛する人々

十字架のそばにいたのは兵卒たちだけでなく、弟子たちの姿もありました。ここには少なくとも5人の名前が挙がっています。そのうち4人が女性で、男性は「愛弟子」と書かれたヨハネで、十二弟子のうちイエス様の側にいたのは彼ひとりだけでした。死刑が行われている所に近づく、どんなとばっちりを受けるかわからなかったのに、彼らはイエス様のそばに居ないではいられませんでした。主は十字架に釘付けになって激しい痛みに苦しんでおられたにもかかわらず、そばにいる母マリヤをいたわって言われます。「婦人よ、ごらんなさい。これはあなたの子です」、お母さんに向かって「婦人よ」と呼びかけるのは、イエス様は救い主という特別な使命に生きていたために、えこひいきすることなく、親子の情を聖別しておられたからでしょう。けれども残してゆく母の身の振り方をちゃんと考えておられました。弟子のヨハ

ネに向かつて、「ごらんなさい。これはあなたの母です」、こう言って主は弟子のヨハネに母の老後を託しました。

これはいったい何を意味するのでしょうか。一つはイエス様が年老いたお母さんの面倒を弟子に任せることによって、子どもとしての責任を果たしたと言えます。「あなたの父と母とを敬え」という十戒を最期の時にも実行されました。もう一つはヨハネと母マリヤが親子になることによって神の家族が始まったと言えます。ヨハネはマリヤを自分の家に引きとって自分の母として仕えることになりました。主は信仰による家族を創造したわけです。イエス様がヨハネと母マリヤを取り持つて、新しい家族を始められました。教会というところもまさに同じで、イエス様の取り持つ「神の家族」です。

## 結論

「ごらんなさい、ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。神のみこころを行う者はだれでも、わたしの兄弟、また姉妹、また母なのである」（マルコ3・34・35）。主を家族や教会、小グループに迎える時、そこに神の家族が創造されます。実際の家族であれば、再創造されると言ってもいいでしょう。この新しい絆をあたためて行きましょう。

## 研究資料

(小平徳行)

十字架の場面である。本福音書では「十字架上の七言」の第三、五、六言が記録されている。今回のテーマは特に第三言に関わることであるが、他の所も取り上げ、本福音書独特の十字架の場면을味わいたい。

## テキスト

23〜24 兵士たちは：上着をとって四つに分け 当時の習慣として、処刑に当たった兵士たちは、特別の報酬として囚人の着物を取ることが許されていた。本福音書では上着と下着を区別して説明している。上着は縫い目に沿って四等分し、下着は縫い目のない一枚織りであり、裂いてしまうと役に立たなくなるためくじ引にきされた。聖書が成就するため 兵士たちがこのように着物を分け、くじ引きにしたのは、彼らの意思を越えた神のご計画であった。彼らは自覚せずに預言を成就した（詩篇22・18）。この出来事はイエスの十字架に対するこの世の無関心、無感覚を象徴している。

25 イエスの十字架のそばには 兵士たちとは対照的にイエスの十字架のかたわらには敬虔な女性たちが立って

いた。本福音書では遠くの方（マタイ27・55）ではなく近くにたたずんでいた女性たちの姿が描かれている。母の姉妹 この女性が誰であるかは知られていないが、他の福音書と照らし合わせると、マルコでは「サロメ」（16・1）、マタイでは「ゼベダイの子らの母」（27・56）と呼んでいる女性であることが考えられる。クロバの妻マリヤ この女性も知られていないが、彼女たちはイエスがガリラヤにおられた時から、いつもイエスにつき従っていた（マルコ15・41）。

26〜27 愛弟子 ヨハネのこと。イエスの十字架に男の弟子が立ち会ったことは本福音書にのみ記されている。婦人よ、ごらんさい。これはあなたの子です イエスは十字架の苦しみの中でも、母マリヤを思いやり、弟子に託し、子としての分をつくした。イエスには弟たちがいたが、まだイエスを信じておらず、イエスの行動に好意的ではなかった。またこの時、彼らはエルサレムには来ておらず、わが子の十字架刑を見て必死で耐えている母マリヤを支える者が必要だった。まさにマリヤはシメオンの言葉のごとく剣で胸を刺し貫かれるような心境であった（ルカ2・35）。これは単なる家族愛を示した出来

事ではなく、重要な真理を象徴するものである。イエスの十字架によるみわざは、贖<sup>あがな</sup>われた者の新しい交わりを創造するものであった。それはキリストにある神の家族としての交わりである。

28 わたしは、かわく ヨハネはこの言葉に旧約の預言の成就を見出した(詩篇22・15)。これは肉体的な渇きとともに、霊的な渇きでもあった。神との交わりが全く断たれてしまったゆえに、絶え入るばかりに神を慕い求める声であった(詩篇42・2、63・1等)。私たちはキリストの贖いゆえに、いつまでも渇くことのない恵みにあずかることができる(ヨハネ4・14、6・35)。

29 イエスにぶどう酒を差し出したことに関してはマルコによる福音書では二つの記述がある。すなわち刑場に着的した時に差し出された没薬を混ぜたぶどう酒(15・23)と十字架上のイエスに差し出された酔いぶどう酒(15・36)である。前者は当時死刑囚に与えていた麻醉薬と考えられ、後者はラテン語で「ボスカ」と呼ばれ、ぶどう酒から作った酢を水で薄めた兵士たちの飲み物であった。前者は十字架刑の苦痛を軽減することが目的であったが、イエスは飲むことを拒まれた(15・23)。本書では

この後者について述べている。これは渇きをいやすためではなく、むしろ渇きを激しくするものであり、ここに兵士たちの残酷さが表れている。これも預言の成就と言える(詩篇69・21)。ヒソブ これは茎を束にしてユダヤ人がきよめの儀式のために用いた(レビ14・4・7、詩篇51・7、ヘブル9・19)。これを十字架の処刑場でローマの兵士が手にしていたのは不思議である。しかしイエスがまことの過越の小羊として、ほふられる時にヒソブが用いられたことは、出エジプトの過越の時に小羊の血を入口の門の柱に塗り付けるために、これが用いられたことを連想させる(出エジプト12・22)。

30 **すべてが終った**(ギ)テテレスタイ 「完了した」の意。これは息を引き取る最後の瞬間がきたという断末魔の叫びではなく、旧約の預言を成就して贖いを成し遂げた勝利の叫びである。**息をひきとられた** 直訳すると「霊を去らせる」となり、この死がイエスの意志に基づく自発的なものであったことを示唆している。新改訳では「霊をお渡しになった」。

**参考図書** 4月2日分の他、山下正雄「ヨハネの福音書」『実用聖書註解』(いのちのことば社)



## 聖書

ヨハネによる福音書19・23～30

## タイトル

十字架による新しい絆

## 暗唱聖句

ごらんなさい。これはあなたの母です。

ヨハネ19・27

## 目標

神との関係、人との関係を変える十字架の力を知る。

## 導入

(土屋開夫)

今日は「棕櫚の主日」と言って、イエス様が十字架にお架かりになるために改めてエルサレムに入城された事を覚える日曜日です。その時、人々は「ホサナ、祝福あれ！」と叫んで、棕櫚の葉っぱを振ってイエス様を大歓迎しました。

ところが、その金曜日には多くの人イエス様に向って「十字架につけろ！」と憎しみを込めて叫んだのです。人間というのは、同じ人の事がある時は大好きになり、スグまた大嫌いになったりします。でも、それではとても本当の友達や仲間とは言えませんね。

人と人を結ぶ、つながりの事を「絆」と言います。

イエス様は人と人が結ばれる本当の「絆」、そして神様

と人が結ばれる本当の「絆」を作るために十字架にお架かり下さったのです。

## 「絆」を壊す、私たちの罪

イエス様はイエス様の事を<sup>わた</sup>妬み、憎んでいる祭司長やパリサイ人達によつて捕まえられ、最初からイエス様を死刑にするための裁判をされ、そして遂に十字架の刑にされてしまいました。でも祭司長やパリサイ人だけではありません。私にも、あなたにも、誰かを憎んだり、神様に逆らう真つ黒な罪の心があります。

具体的に考えてみましょう。あなたはお母さんやお父さんを、また兄弟を、学校の友達を憎んだことはありませんか？「アイツなんか大っ嫌いだ。苦しいに。いなくなればいいのに」と。そこまでは思わなくても、人を大切にしない心があるでしょう。そういう心が友達や家族との結びつき、「絆」を壊してしまうのです。神様はそのような私たちの罪の心を赦し、清めるために、私たちの罪を全て、御子イエス様に身代わりに背負わせ、十字架につけられたのです。

## イエス様による本当の「絆」

イエス様は十字架の上で7つの言葉を言われましたが、一番最初に言われたのが「父よ、彼らをおゆるしてください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです。」（ルカ23・34）でした。ご自分の死によって、私たちの罪が赦されるように、上を向いてとりなして祈って下さったのです。

そして下を向くと、イエス様を産んで育ててくれたマリヤさんと弟子のヨハネさんがいました。イエス様はマリヤさんに言われました、「婦人よ、ごらんなさい。これはあなたの子です」。そしてヨハネさんには「ごらんなさい。これはあなたの母です」と言われました。

マリヤさんとヨハネさんは血のつながった親子ではありません。言わば全くの他人です。けれども二人とも同じイエス様を救い主と信じていました。そして二人ともイエス様のそばを離れませんでした。罪を赦すために血を流して下さったイエス様の十字架の元に二人ともいたのです。この二人のようにイエス様によって結ばれた人たちは本当の家族、神の家族となるのです！ 天のお父様である神様の子だとされた、神の家族なのです！

イエス様はマリヤさんとヨハネさんに語られた、この言葉によって、その事を教えて下さったのです。

## まとめ

去年の9月、日本伝道会議というのが神戸であつて、日本中からたくさんクリスチャンが集まりました。その時、初めて会う人もいっぱいいましたし、外国の人もいました。でも、初めてでも、神の家族の不思議な「絆」を感じて、一緒にイエス様のお名前によって父なる神様にお祈りが出来ました。

同じ天のお父様に愛され、神の子どもとされている。同じイエス様によって罪が赦され、救われている。イエス様の十字架によって結ばれた「絆」こそ、神様と人、そして人と人とを結ぶ真の絆なんですね！

この「絆」があなたの周り中に、日本中に、世界中に広がるようにお祈りしましょう！

♪ファミリート（PW37）



# 聖書 ヨハネ20・24・29 テーマ 信仰への招き

## 序論

(水川武志)

共に集う場(礼拝)に一緒にいなかったトマスは、生きておられる主の顕現に浴する機会を逃してしまいました。礼拝を欠席した結果に伴う失態です。へわたしたちは主にお目にかかった」と証しする同僚の言葉がわからない。霊的顕現ではなく、体の伴った復活体ということが理解できない。このトマスの叫びを、主イエスは聞いてくださったのです。トマスも集う場に、復活の主が再び顕現くださった。そして、み言葉を聞いて信じる信仰の神髄に、世のキリスト者を導いてくださったのです。

## 一、彼らと一緒にいなかったトマス

トマスがなぜ他の弟子たちと一緒にいなかったのか不明です。殉教の覚悟のできていた(11・16)トマスは、他の弟子たちがユダヤ人を恐れて家に閉じこもっていた時、一人町に出て、食料の確保か、町の様子を見るため外出していたのだと考える人もあります。ライルは「十分な理由もないのに神の民の集まりから離れることは、

いつも賢明でない」と手厳しい見方のあることを紹介しています。確かに共に集う礼拝の場で、生きている主の臨在に触れる事は事実(マタイ18・20)です。トマスの痛みを繰り返さないようにしたいものです。

## 二、戸惑うトマス

「わたしたちは主にお目にかかった」と証しする弟子たちの言葉を信じられないトマスは、イエスを信じられなくなったのではありません。体の伴う復活ということが理解できないのです。人が確認できる領域を超えた内容だからです。彼のこの戸惑いは、現代の私たちの課題でもあります。墓が空で、遺体が見当たらない状況証拠や、「私たちはお目にかかった」という証言があったとしても、体の伴う復活となると理解できないトマスの正直さに、軍配をあげたくなるのではないのでしょうか。「私は、その体に十字架の痕跡きずあとを確認しなければ、決して信じません」とのトマスの正直な訴えに、同感できるところがあります。トマスは、主の復活を肯定したいために、確かな証拠を手にしたかったのではないのでしょうか。

## 三、トマスの求めに応えられる主

トマスは、彼をだましたり陥れたりする動機を全く持

たない、親友10人の証言を信ずることを拒否しました。これはとても悲しいことです。

これは、私たちがどんなに意をつくしてイエスの神であることを証言しても、信仰に導けないむなしさを体験した時のことを思い出させます。このような時、「弟子は、トマスに証しをし、彼の不信仰を取り除きとう御座います。主はこの弟子と共に働いてトマスにご自身を現し給います」とバックストンは解説しています。

いつも自分の手と目で確認できない物を信じられない、トマスのような人は多いのです。重体の中風患者をイエスの所に連れて来た人たちの熱心さをご覧になられた主は、中風患者の罪を赦し、病を癒されました。10人の弟子たちは、かたくなに信じることを拒むトマスを、非難したり排斥したりしていません。1週間後の日曜日、彼らはトマスと共に家の内で集います。前週の礼拝の再現です。戸を閉ざした家の中に主イエスが入って来られ、中に立ち、〈安かれ〉とみ声をかけてくださいました。私は受洗して一年目、新生の恵みを頂いたにもかかわらず、罪に勝てない自分に悩まされました。聖餐礼拝で、今日は聖餐を断ろうと決心して臨んだのです。「これは

私たちのために裂かれた主イエス・キリストの御体です」との聖餐式文の言葉を耳にした時、十字架の主の臨在に包まれたのです。「こんな罪人の私のために、身代わりとなって十字架におかかりくださった主イエス様、感謝します」と、パンとぶどう汁を押しいただきました。逆転の祝福でした。

〈あなたの指をここに付けて、わたしの手を見なさい……。トマスはイエスに答えて言いました、〈わが主よ、わが神よ〉。トマスはイエスの復活体に接して、ただ彼が甦り給うたという事実を信じただけではなく、もっと深く、イエスの神性に対する信仰を告白したのです。そしてこれは、この福音書の冒頭にある「言は神であつた」という宣言に相応するものです（高橋三郎）。

### 結論

トマスの信仰告白は、これ以降の信仰者、すなわち、すべてイエスの姿を見ず、イエスの弟子の言葉による宣教によって、信じて救われる者たちの初めとなったのです（1ペテロ1・8〜9）。「御使たちも、うかがい見たいと願っている事である」（12）。この祝福に与っている事を感謝しましょう。

## 研究資料

(中島啓一)

## テキスト

24 デドモと呼ばれているトマス デドモはギリシヤ語名、トマスはアラム語名で、いずれも「ふたご」の意。共観福音書では名前だけの登場だが、本書では他に2回その言動が記録されている(11・16、14・5)。そこから垣間見えるのは、忠誠心に富むが、悲観的な人物像である。イエスがこられたとき、彼らと一緒にいなかった トマスだけ不在であった理由は不明。悲嘆に暮れる時、仲間と慰め合うのを好む人もいれば、一人で過ごしたい人もいる。悲観的なトマスは後者であったのかもしれない。その時に仲間と一緒にでなかったことは決して責められることではないだろう。

25 その手に釘あとを見、わたしの指をその釘あとにさし入れ、また、わたしの手をそのわきにさし入れてみなければ トマスがこのように言うのは、弟子仲間が彼を説得するべくイエスの肉体の様子について詳細に語ったからだろう。トマスは、彼らが何かを見たことを疑っているのではない。問題は何を見たかである。彼は、弟子仲間が幻影や

幽霊といった実体(肉体)のないものを見たと考えたのである。決して信じない 「疑い深いトマス」というレッテルを貼<sup>は</sup>られるゆえんだが、程度の差はあれ、弟子仲間が女性たちの報告に対してとった態度と根本的には変わらな<sup>い</sup>。トマスとて、その場にいれば信じていたはずなのである。

26 八日ののち ユダヤでは起点の日も含めて数えるので、7日後、すなわち次の日曜日である。

27 あなたの指をここに付けて：信じない者にならないで、信じる者になりなさい 復活のイエスは、霊だけではなく、手で触れる肉体を持つ存在である(ちなみに教会が直面した初期の異端思想はキリストの肉体を否定する<sup>ドケチズム</sup>仮現説であった)。イエスはトマスが弟子仲間<sup>ドケチズム</sup>に言い放ったことをご存知であったので、見るだけでなく、手で触つて確かめよと招かれたのである。もちろんこれは単なる勧めではなく、信仰へのチャレンジである。

28 わが主よ、わが神よ 復活の主を見、またその声を聞いたとき、その体に触れるまでもなく、トマスの心の奥底からこの言葉があふれ出た。これは単なる呼びかけではなく信仰告白である。しかも抽象的な神学的定義ではなく、

「わが」という人格的な告白である。イエスこそ神であり、自分は僕としてその真の神に喜んでお仕えする、との決意表明なのである。意外にも、神という表現がイエスに用いられる場面は極めて少ない（1・1、テトス2・13、ヘブル1・8、1ヨハネ5・20）。そのうちの一つ、「言は神であつた」という本福音書の最初の宣言がこのトマスの信仰告白によつて確証づけられるのである。その意味で、この信仰告白は、本福音書の頂点と呼べる。一度は復活を疑った者が、よみがえった主に対する最高の信仰告白を言い表したのである。

29 あなたはわたしを見たので信じたのか イエスは必ずしもトマスを非難しているわけではない。他の弟子たちもみな、見るまでは信じなかったのであり、彼らがトマスよりも1週間早く信じたのは、1週間早くイエスを見たからである。しかし重要な点はそこではない。見て信じることが、見ないで信じることよりも劣るわけではないし、反対に、見ることができないのは不幸だというのでもない。重要なことは、トマスや他の使徒たちのように復活の主を見る特権にあずかる人たちもいるが、教会の歩みの中では、大多数がそうでない人たちだということである。そして、

その後者も決して不幸ではなく、幸いなのだということである。見ないで信ずる者は、さいわいである よつて「いかなる人たちは、さいわいである」で有名な八福の教え（マタイ5章）と同じ形式で、イエスはこのように語るのである。使徒たちの時代が過ぎ去れば、すべての信者は、見ないで信じてはならない。それがなぜ幸いなのかというと、聞いて信じることができるからである。「信仰は聞くことによるのであり、聞くことはキリストの言葉から来るのである」（ローマ10・17）。ヨハネはこのことを知っていたからこそ、「キリストの言葉」、すなわちキリストの物語を、福音書に著したのである。その目的は読む者が信仰に至るために他ならない（31）。トマスは最初の日曜日に不在であつたことで、実質的に、よみがえりのイエスを見ることのできない後世のクリスチャンたちと同じ位置にあつた。この福音書を読んだ最初の読者たちは、イエスを見なかったが、信じた。同様に、現代の読者たちもまた、イエスを見ないが、信じることはできるはずなのである。

参考文献 注解書 Beasley-Murray (WBC), Lindars (NCB) 他その他 IVP Bible Background Commentary: NT.

## 聖書

ヨハネ20・24～29

## タイトル

ゆるがない事実！（イースター）

## 暗唱聖句

あなたはわたしを見たので信じたのか。  
見ないで信ずる者は、さいわいである。

ヨハネ20・29

## 目標

キリストの導きの中で目に見えないキリストを信じる者となる。

## 導入

(松浦みち子)

ハッピー・イースター。イエス様が墓の中からよみがえられたうれしい朝です。十字架にかけられて亡くなられたイエス様は、墓に葬られ、入り口には大きな石がゴロン、ガシッ！と転がされました。しかも、誰も開けることができないように封印されました。ところが、その墓を破って三日目の朝早く、イエス様は復活されました。このゆるがない事実は、弟子たちにいち早く伝えられました。しかし、「そんなことあるわけないじゃん。」「信じられないよ！」と、弟子たちは戸惑いました。でも、イエス様はいろいろな方法で、弟子たちに会われ、よみがえったことを明らかにして下さいました。

## イエス様にお会いしなかったトマス

イエス様の死後、弟子たちの様子はどんなだったでしょう。一つの部屋に集まり、「今度は、ぼくたちが捕まえられ、殺されるかもしれないな」「こわいなあ、どうしよう！」とガタガタ震えていました。そしてすっかりと戸を閉め、鍵をかけた部屋で縮こまっておりました。そんな時のことです。復活されたイエス様が突然、弟子たちのいる部屋にスツと入ってこれた。「平安があるように」と言われました。そして、十字架の釘跡のある手と脇とを見せられました。復活されたイエス様を見て弟子たちは大喜びしました。ところがその時たまたま、12弟子の一人トマスはその場に居合わせませんでした。しばらくして、トマスが外から帰って来ると、他の弟子たちが口々に大喜びして「私たちは主にお会いしたよ！」と言っています。「えっ。何言ってるんだ。うそだろう！」と全然信じることはできません。「おいおい、お前たち、気が変になったのかい。死んだ人が生きかえるなんて、そんなバカな話があるか。私は手に釘跡を見、私の指をその釘跡に差し入れ、私の手をそのわき腹にさし入れてみなければ、絶対信じないぞ！」と言いはりました。

## トマスに会われたイエス様

それから一週間たちました。その日も弟子たちは戸を閉め、部屋の中にいました。今度はトマスもいます。イエス様は鍵のかかった部屋の中にスツと姿を現され、「平安があるように」とおっしゃいました。それからトマスのほうを向いて、「トマス、あなたの指をここにつけて、わたしの手を見なさい。手をのばしてわたしの脇にさし入れて見なさい」と促されました。トマスは触らなくてもよく分かりました。すぐ床にひれ伏し、「わが主よ、わが神よ！」と答えたのです。すると、イエス様は、「トマス、あなたはわたしを見たので信じたのか。見ないで信ずる者は、さいわいである」とおっしゃいました。

## 見ないで信じる者

イエス様は、トマスを責めておられるではありません。トマスに見ないでも信じることの大切さを教えてくださったのです。イエス様のよみがえりは「えっ！ うっそー!」とだれでもが信じるのができないような事柄ですが、本当のことです。ゆるがない事実です。

今、私たちは目でイエス様を見ることはできませんね。どうしたら、今も生きておられるイエス様を信じるこ

ができるのでしょうか。それはみ言葉による以外にありません。聖書には、復活の主に出会った人々の真実な証しが書かれています。また、復活の主に出会って人生が変えられた多くの人々の信仰の足跡が残されています。それらを通して、心からイエス様を信じることができます。『あなたがたは、イエス・キリストを見たことはないが、彼を愛している。現在、見てはいないけれども、信じて、言葉につくせない、輝きにみちた喜びにあふれている』（1ペテロ1・8）と聖書に書かれています。イエス様は、トマスとのやり取りを通して、後に生きる私たちのために、「見ないで信じる者は、さいわいである」と言ってくださいなのです。

目に見えない神様は、聖書を通して語ってくださいます。旧約聖書、新約聖書66卷には、イエス様が神の独り子としてこの世に来てくださり、十字架にかかって救いの道を開いてくださったこと、信じる者に永遠の命が約束されていることが書かれてあります。信じるならば、あなたの毎日は、神様の愛と恵みに満ちた喜びでいっぱいの日々となるでしょう。

♪主イエスとともに♪（ホ118、イン80）



# 聖書 創世記1・1～31 テーマ 天地創造の神

## 序論

(金井信生)

聖書は、「神がいるかないか」についてではなく、「神がこの世界を造られたから、わたしはここにいます」ことに気づかせ、どこに心と生活の基盤を置くことが良いことなのかを教えてください。

## 一、「はじめ」がある

真理を求めて聖書を学ぼうとする人、悩みを抱えて飛び込んでくる人、あるいは何の気なしに開く人と、聖書を開くきっかけはさまざまです。しかし、まず目に飛び込んでくるのは、「はじめに神」という言葉です。

私たちが何かをしたり、考えたりできるのも、はじめに神がこの世界を造られたからです。人間のあれこれに先立って、そしてそれをはるかに超えて神の御業の中にすべてが治められている宣言がここにあります。

また、「光あれ」の言葉に続いて天地創造の御業が進められます。私たちが目にする世界のすべてのものに始ま

りがあり、またそこには神の関与がありました。すべて造られたものに神の目が行き届いているのです。

そして、「始められた」と聞くと、「では終わりは？」との関心を呼び起こします。もちろん、終わりはまだ先のことです。「はじめ」と「おわり」がしっかり定められることが、人生全体にも日々の歩みにもよりどころとなります。神が始められたのだから、神がどのように結末へと導かれるのか、読み進める中に大きな期待がわいてきます。

## 二、目的と秩序のある世界

神が命じられると、「そのようになった」と、繰り返されるが、創造の御業が進められていきます。「科学」は「どのようにしてできたのか」、「何からできているのか」などを探求します。しかし、聖書は「だれが造ったのか」、「なぜ造ったのか」を教えてください。

私たちが生きている中でも、どうしてこうなったのかと原因を追究することもあります。かえって問題がややこしくなることもあります。また、過ぎ去ったことについて手出しの出来ないこともあります。その中で、神

の定めた秩序の中に生かされていることを認めることが大事です。

神の手の中にすべてが治められていることを信じ、すべてのことに意味があり、目的があることを知る方が、前向きに生きることができます。

神は造られたものそれぞれに置かれるべき場所を与えられました。また、〈種類にしたがって〉造られました。では、わたしたち〈人〉はどこに住むように造られており、どんな種類として造られているのでしょうか。

この課題は次週にくわしく取り上げますが、科学をはじめとする人間の知恵だけでは得られない答えを、聖書は示しています。

### 三、神の目になう世界

へはなはだ良かった、これが、造られた世界に対する神の評価です。自然界を調べていくと、動物でも植物でも鉱物でも、その時は役割がわからなくても、調べていくうちに無用のものはひとつもないことが明らかになってきます。

それに対して人間の作る物は、芸術作品ではほめる人

もあればけなす人もいます。工業製品では、便利だというので一斉に使われたものが、しばらくすると環境破壊になったりしています。人間お互いもそれぞれ良いとする基準が違い、争っています。人間も含めてへはなはだ良かったはずの世界は、どこにいつてしまったのでしょうか。

人間によって乱され、汚されてしまった世界に、神も心を痛めておられます。人間なら失敗作として投げ出しても仕方がない状態ですが、神はどこまでもご自分の作品を愛し通し、関わりをもたれます。愛によって、さらに良いものになろうとされます。それが続いて記されていく聖書の歴史であり、神の救いのご計画です。

### 結論

神によってこの世界も私も造られ、それぞれの役割と使命の中で生かされていることを喜び、天地創造の神を信じましょう。



## 研究資料

(井上義実)

創世記はヘブル語での原題は冒頭の言葉である「**ヘ**ベ  
レーシス」である。七十人訳ギリシャ語聖書では「**ギ**ゲ  
ネシス」と訳され、英訳では「ジェネシス」である。

## テキスト

## 1と2 神は天と地とを創造された 創造された(ヘ)

バーラー) ヘブル語には他にも創造と訳される単語は  
あるが、バーラーは神による創造以外に用いられない。  
人の手による造作とは全く次元が異なり、無から有を生  
み出す神の業であることを表わす。創造はただ、神の絶  
対的な意思によるものであり、人がうかがい知るもので  
はない。全宇宙の事物は神の被造物であるので、天地は  
神ではない。自然界のあらゆる生物も神ではない。神は  
創造された、とあるが、第一格の父なる神だけではなく、  
三位一体の神が創造に関与されている。ヨハネ1・3に  
は「すべてのものは、これによってできた」と記されて  
おり、イエスが創造の指導的な立場であることを示唆し  
ている。神の霊が…おおっていた 聖霊がすべて関わっ  
たのである。はじめに とあるが、神の創造の業がなさ

れた時に、時が刻まれ始めたのである。創造は物質の始  
まりであり、時間の始まりでもある。

3 神は「光あれ」と言われた 神は創造のすべてを言  
葉によって命じられ、その業をなされた。神の言葉がど  
れほど力あるものかを知る。光はエネルギーを持ち、や  
みを追いやるものである。第一日(ヘ)ヨーム・シャード  
日を表わすヨームという名詞と序数の一を表わすシャ  
ードが組み合わされている。この一日を24時間と見るか、  
さらに長い期間と見るのかという論議があり、単純に現  
在の一日とは言い切れない。ヨームは旧約聖書に多用さ  
れ、訳語は50以上に及ぶ。時代、永遠などの意も含まれ  
る。全能の神による創造であるから、期間の長短を定め  
ようとすることはあまり意味のない論議であらう。

7 おおぞらの下の水とおおぞらの上の水… 地球は水  
の惑星である。大気は気体だけではなく水の粒子ででき  
た雲を持ち、水は空と地上(海や川)とを循環している。  
9 かわいた地が現れよ 地上はすべて水で覆われてい  
たが、陸と海が区分された。今までは無生物であったが、  
生命を持つ生き物が生まれた。植物は光合成を行い、食  
物連鎖の基礎となり、他の生物の食物となる。

11 種類にしたがって 神は種類という区分を造られた。近年は生命科学が発達し、遺伝子操作も可能になった。人間の営利、独善によって神の秩序、神の領域を乱してはならない。

14 天のおおぞらに光があつて 神は精密な天体の運行を定められた。一日、一週間、一月、季節、一年という秩序正しい期間を設けられた。神は人間に、日を数えることを教えられている。

20 水は生き物の群れで満ち、鳥は地の上、天のおおぞらを飛べ 神は初めて動く生き物を形づくられた。最初に造られた動物は、水中の魚類や哺乳類、空中の鳥類である。地上の動物の創造は、その後になる。

22 神はこれらを祝福して言われた 神の祝福は特に旧約においては、繁栄と結びついている。動物においては子孫が多く与えられることである。

24 家畜と、這うものと、地の獣とを種類にしたがっていだせ 地上の人間以外の生き物が造られた。家畜、爬虫類、その他の動物という分類である。彼らの間に争いはなく、支配するものはまだ現れていなかった。

26 われわれのかたちに、われわれにかたどって人を造

り…治めさせよう 創造の最終段階であり、最高の被造物として、神にかたどって人間が造られた。かたどるとは外面的な形の引き写しではない。神と交わることできる霊的な存在こそが、神のかたちを引き写す証である。人間もまた被造物であるので神ではない。しかしながら、神との類似性を持つものとして人間は形づくられた。他の動物にはない、自分は何者なのかという自意識を持ち、人格性を備えている。自分の行動に責任が伴う自由を持ち、道徳性が備えられている。他の被造物の支配を可能にする理性と、知性を兼ね備えている。人間は神から与えられた良い賜物を生かして、神に地上の統治を委託された至高の存在である。

31 神が造ったすべての物を見られたところ、それは、はなはだ良かった 神は六日間と記された区分の中で創造の業を完成された。今までの創造の過程は良しとされた。創造の完成に至って、神は満足をなさった。人間が自由を誤って用い、神に反逆するまでは、現在では想像できない平和と秩序が地に満ちていたのである。

参考図書 G. Ch. Alders (Bible Student's Commentary) 他

## 聖書

創世記1・1-31

## タイトル

天地創造

## 暗唱聖句

はじめに神は天と地とを創造された。

## 目 標

天地創造の神を信じる。

創世記1・1

## 導入

(土屋開夫)

今日は聖書の一番最初、「天地創造」のお話です。

ところで今、皆さんの周りにはどんな物がありますか？ CS部屋のイス、机、講壇などがあるでしょう。

これらの物が誰も何もしないのに、ある日、勝手に出来た、現れた、と言ったら「そんなのウソだあ」と思うでしょう。そうです、勿論そんな事はありません。どんな物でも誰かが何かの目的、役割のために作ったのです。

では今度は自然のものをみてみましょう。花瓶の花、青い空や白い雲、雨の水、山、何か生き物もいるかな？ これらの自然のものも、誰も何もしないのに勝手に出来る筈がありません。勿論、造った方がいるのです。それは勿論、創造主である本当の神様です！

## なぜ天と地を造られたのか

聖書の一番最初、1ページの1行目に「はじめに神は天と地とを創造された。」とハッキリ宣言してあります。でもなんで神様は「天と地」つまり宇宙と地球を造られたのでしょうか？ ちょっと考えてみて下さい…。

実は、神様が一番造りたかったのは、私たち人間なんです。神様は自分によく似た子どもが欲しかったのです。そして愛したいと思われたのです。でも、まだ何もない真っ暗な所にいきなり人間を造ったら、どうなっちゃいますか？ そう、生きられませんね。だから神様は人間を造る前に、人間が住むのに一番ふさわしい環境をバッチリ整えて下さったのです。

皆のパパやママもそうだと思います。皆がオギャーと生まれてくるのをとても楽しみに待っていたと思います。でもその前に、色んな物が必要です。赤ちゃんベッド、赤ちゃん布団、赤ちゃん服、オムツにミルク、寝る時も寂しくないように可愛くて柔らかい縫いぐるみ、カランカランと音の出るおもちゃ、他にも色々準備して、そして皆が生まれてくるのを待っていたのです。

## 「光」の素晴らしきもの

まず神様は「光」を造って下さいました。物理学に詳しいある人が初めて聖書を読んだ時、「聖書には神が最初に光を造られたと書いてあるんですね！ 物理学では光がこの世界の全ての基準（ものさし）である事は基本中の基本なんです。聖書は真理ですね！」と驚いていました。

そうです。聖書は勿論、おとぎ話でも作り話でもありません。本当の事が書いてあるのです。

さて、「光」というこの世のもののさしを造られた後は何を造って下さったでしょう？ 特に私たちの住む地球の事を中心に書かれています。大空の下の水（川など）と、上の水（雲など）備えて下さいました。水は生きていくために絶対必要ですね。この広い宇宙で、水が液体として存在している星は地球ぐらいだそうです。ちょっと寒ければ水になっちゃうし、ちょっと熱ければ湯気になっちゃいます。実はこれも神様の奇跡的なバランスなんです。ゴクゴク水が飲めるって嬉しいですね。

でも川や海ばかりでは私たちは生きられません。そう地面が必要です。神様は陸を造って下さいました。

そしてあらゆる植物、また実のなる果樹を造って下さいました。皆の好きなフルーツは何ですか？ 不思議な事にどれも人間の手に取りやすい大きさですね。

次に朝・昼のために太陽、夜のために月や星を造って下さいました。真つ暗じゃ怖いでもんね。

そして水の生き物（魚など）、空の生き物（鳥など）、陸の生き物を造って下さいました。動物って可愛いですね。でもそれだけじゃなく、スゴイ能力を持っています。誰が能力や知恵を授けたんでしょう？ 勿論、神様です。

### まとめ

さて、そのようにして神様は私たちが住むための素晴らしき場所を用意して下さいました。そして最後に人間を造って下さいました。人間は他の生き物と違って特別に造られました。それは「神は自分のかたちに人を創造された」（27）とある通りです。なんと、尊い神様に私たちは似せて造られているのです！ なんてスゴイ事でしょう。それくらい私たちは、そしてあなたは、神様に特別に愛されているんですよ！

♪すばらしい世界♪（PW44）

# 聖書 創世記2・15・17、3・1・7 テーマ 罪の起源

## 序論

(金井信生)

はなはだ良いものとして造られた世界に、罪と死が入り込みました。それは「神のかたち」として造られた人間が、何によって生かされているのかを見失ってしまった結果でした。

## 一、神の戒め

主なる神は人を造り、エデンの園に置されました。園は豊かに潤い、「見て美しく、食べるに良いすべての木」(9)がはえていました。主なる神は、「あなたは園のどの木からでも心のままに取って食べてよろしい」とおっしゃられました。ただ、「善悪を知る木からは取って食べてはならない」と命じられました。

一章において「地を従わせよ、すべての生き物を治めよ」と命じられた人間ですが、今度は、自分自身の心を主の戒めに従って治め、従わせなければなりません。最大の難関ですが、神の言葉に従うことのできる自

由な意思を、すでに人は与えられています。

神の戒めは、人を苦しめるためではなく、命を保たせるためのものです。また、神のかたちに造られた人間に、「これができるよ」と信頼が込められた言葉です。「戒め」と聞くと、どうしても窮屈に感じますが、神は全体的には人に自由を与えられるお方です。十戒を見ても、神と隔てなく交わりがあれば当然のことや、人間関係でも本来する必要のないことをあらためて戒められているだけです。

〈食べると、きつと死ぬ〉という言葉も人をおどす言葉ではありません。まだ死が入ってきていなかったときに、死の恐ろしさも悲しさも人は知りませんでした。善悪の木に関する戒めは、この木の実に何か毒があるからではありません。神に従うことよりも自分の考えを選んで、命の源から切り離されてしまうことが、死そのものなのです。

## 二、へびの存在

ここに登場するへびは、人を誘惑し、神にそむかせる悪魔の存在を示すものです。しかし、人間の側に隙(す

き)がなければ、へびも立ち入ることはできません。

へびの言葉は、人の目を、神から与えられた「どの木からでも」という大きな自由からそむけさせ、小さな禁止の方向に向けさせました。また、その禁止が、〈どの木からも取って食べるな〉という、大きな重荷であるかのようを感じさせました。

「これこれをしなさい。他のことは考えてはいけない」というのと、「これだけはしてはならない。しかし、他は自由にしなさい」というのと、どちらがより人間らしく、また創造的に生きることができそうでしょうか。

へびの言葉は、神に従うことは縛り付けられることなどではないかという、疑いの心を起こさせました。エデンの園という、これ以上ない恵まれた環境にいても、客観的に自分の姿と周囲を見ることができませんでした。やはり、「み言葉にしたがって、それを守るよりほかにありません」(詩119・9)とあるように、神の言葉に従う以外に、自分を正しく保つことはできないのです。

### 三、心がひかれて

へびの言葉は、神の言葉を否定し、人間に自由がない

かのように誘いかけました。女は答えますが、〈これに触れるな〉と神の言葉に付け加えて強調し、一方では〈死んではいけないから〉とゆるめています。

神の言葉からそれだした女は、ついに禁じられていた木の実に目を向け、そそのかされて手を伸ばし、食べてしまいました。

また、女にその実を手渡された夫も、食べてしまいました。男は女のそばにいながら、へびとのやりとりにも、女が手を伸ばして実を取ることに間関わってきません。「肉の欲、目の欲、持ち物の誇」(イヨハネ2・16)と指摘される罪の根も、愛のあらわれてこない「無関心」も、初めの罪から存在し、今に至っています。罪はまず心の問題であり、神と交わる霊の問題なのです。

### 結論

罪の本質は、神のもとで生きることをやめることです。誘惑や試練によって疑いと不信仰に陥らせる罪の力に対しては、み言葉に正しく立って神との交わりに守られるほかはありません。



## 研究資料

(井上義実)

先週より「創造・墮落」の単元が始まっている。今週と来週は、エデンの園で起こった、へびが関わる誘惑、人間の陥罪かたがはの記事である。

## テキスト

2・15 エデンの園 エデンは発音どおりの音写で、語源は明らかではない。シュメール・アッカド語のエディヌエディヌ(荒地、または平地)から来ているとも考えられる。園(ヘガン) 囲われた場所という意味である。ギリシヤ語七十人訳聖書では、ベルシヤ語源のパラディソン(英語のパラダイス)と訳出。エデンの園とパラダイスを同一視する考え方はここから来ている。地理的には一般にチグリス川、ユーフラテス川の間地域と考えられるが、明確に同定することはできない。これを耕させ、これを守らせられた 耕させ(ヘガン) 耕作、農耕を意味する。人間の勤労は農業と、園の管理から始まったのである。神がまず働かれて創造がなされたように、人間の怠惰、安逸のために園が造られたのではなく、神に仕えるためである。

16く17 あなたは園のどの木からでも心のままに取って食べてよろしい。しかし善悪を知る木からは取って食べてはならない。神は人間に、他の動物にはない自由意志を与えられた。人間が神のかたちに造られ、神との愛の交わりを持つものとされたからである。自由とは、好き勝手と同義語ではなく、明確な責任を伴うものである。人間は神の被造物として、神に従順であることが求められている。神の命令を守ることが、人間の側で何の解釈も差し挟むことのできない絶対なものである。食べてはならないという動詞は強意語幹が用いられ、最も強い禁止を表わす表現となっている。それを取って食べると、きつと死ぬ 禁じられた木の実を食べることの刑罰は、死という厳しさである。神の断固とした意思を思わされる。

3・1 へび(ヘナーハース) へびを指すいくつかの言葉が旧約聖書中にあるが、一般的に用いられる語である。へびは各地の神話や伝承に良く出てくるが、古代中東でも悪魔的な関連をもつものとして捉えられてきた。黙示録12・9では悪魔は年を経たへびと記されている。誘惑と陥罪にへびは関わったが、短絡的に動物のへびが

悪魔であるとは言えない。へびが最も狡猾であった新共同訳では、狡猾を賢いと訳出。この出来事で人間は自由を誤って用いたように、へびは賢さを誤って用いた。どの木からも取って食べるな 人間に罪を犯させようとするへびの巧妙なすり替え、誘導が始まる。へびが悪魔であるとは言えないが、悪意、邪悪さは際立つものがある。神が食べるなど命じられたのはただ一本の木であるのに、へびはまるで全部であるかのようにエバに問いかけた。人間は神の善意を全く疑わなかったが、へびの問いは神が厳しく理不尽であるかのように思わせた。

3 これに触れるな、死んではいけないから エバはへびの誘導にのせられてしまう。へびの問いは誤った問いかけであるから、「違う」と明確にへびを退ければよかった。触れるなどは神は言われていない。神は「死んではいけない」と言われたのではなく、「きつと死ぬ」と言われた。エバの心の変化、退歩をへびが見逃すはずはなかった。

4 あなたがたは決して死ぬことはない 神が「きつと死ぬ」と言われたことを、へびははっきりと否定している。神への恐るべき反逆である。

5 あなたがたの目が開け、神のように善悪を知る者となる へびの論点は、神は人間をご自分よりも低い存在に止めておくために、禁止をされているという点にある。へびはこのことが極めて不当なことに、エバに思い込ませようとした。へびは人間が神のようになるという、素晴らしい魅力を持って誘惑した。

6 食べるに良く、目には美しく、賢くなるには好ましい すでにエバからは、へびの言葉を否定し、正しい道に歩む力がそぎ取られていた。誘惑は理性に働くのではなく、五感に働く。その実を取って食べ、…彼も食べた神様に従うことを踏みにじったエバであった。側にいて止めるべき夫も、無批判に同調し、同じ行動をとった。

7 ふたりの目が開け へびが言ったように、即座に死ぬことはなく、二人の目は開かれた。しかし、二人は神のようになったのではない。二人が最初に知ったのは、罪と恥である。それは、罪の結果として、神を避け、自分を覆い隠そうとする行為である。二人の体はその場で死ぬことはなかったが、死は確実に入り込んだのである（ローマ6・23）。

参考図書 4月23日分と同じ。



## 聖書

創世記2・15～17、3・1～7

タイトル  
暗唱聖句

罪に負けるな！ み言葉に従って：  
善悪を知る木からは取って食べてはなら  
ない。それを食べると、きつと死ぬであ  
ろう。

創世記2・17

## 目 標

罪が不信仰から生まれることを知り、み  
言葉に信頼し、従う者となる。

## 導入

(和田 治)

「のぼるな！ キケン！」看板に赤で書かれているの  
に、がけの上の大きな松ぼっくりを取りたくて治くんは  
登りはじめました。間もなく…ドッシーン！ 「いてて  
て！」すべり落ちて尻もちをついてしまいました。皆さ  
んは「ダメー！」って言われているのに、つい逆をやつて  
しまうこと、ありませんか？ 今朝の個所には、アダム  
とエバが大切な神様からのお言葉の逆をしてしまったこ  
とが書かれています。このことによって私たち人間に恐  
ろしい「罪」が入ってしまったのです！

## 神さまのみ言葉

最初の人アダムは、神様が最初にお造りになった人間

です。私たち一人一人も、アダムと同じように神様の作  
品として造られ、愛されているんですね、嬉しい！

ある時、神様はアダムを「エデンの園」という素晴ら  
しい場所で生きるようにして下さいました。そして一つ  
の命令をされたのです。「園のどの木からでも自由に  
取って食べなさい。でも、善悪を知る木からは取って食  
べてはならない。それを取って食べると、必ず死ぬ！」。

神様はアダムに意地悪をしようとされたのでしょうか？  
いえいえ！ 愛にあふれた神様はアダムを幸せに  
するためにお命じになったのですね。同じように、私た  
ちに下さっているどんな御命令も、私たちが本当に幸せ  
になるための大切なみ言葉なのです。神様のみ言葉であ  
る聖書を読んで従う人は、罪から守られ幸せになれます。

## 悪魔の誘惑

神様は、アダムにエバを妻として与えられました。ア  
ダムはエバと一緒に神様と親しく交わりながら、とって  
も幸せな日々を過ごしていました。

しかし、ある時、エバのところに悪賢いヘビがやって  
来ました。ヘビはエバに言いました。「園にあるどの木  
からも取って食べるなど、ほんとうに神が言われたので

すか？」するとエバはこう答えたのです。「園の木の実を食べることは許されていますが、ただ園の真ん中にある木の実については、取って食べるな、触れるな、死んではいけないからと、神は言われました」。はい、ここで問題です。エバの答えは神様がおっしゃったとおりですか？：そう、ちょっと違いますよね？ 神様は「必ず死ぬ」と言われたのに、エバは「死んではいけないから」と言いましたよね。さあ大変！ ヘビの定番です。「あなたがたは決して死ぬことはないでしょう！ それを食べると、あなたがたの目が開け、神のように善悪を知る者となることを、神は知っておられるのです」。あれ？ 不思議：なんだかとてもきれいでおいしそう！ 賢くなるに違いない！ そんなふうに見えて来たのです。うん、がまんできない！ エバはどうとうその木の実を食べ、いっしょに居たアダムにも上げました。アダムもパクリ！ 神さまのおっしゃることを破ってしまったのです。これこそ「罪」の始まり：ここから私たち人間の中に罪の性質が入り込んでしまったのです…！。

ヘビは悪魔です。皆さんは、悪魔がいることを知っていますか。悪魔は今でも、皆さんを神様から遠ざけ不幸

にしようと誘惑をします。悪魔の誘惑にのらないように気をつけましょう。でもどうやって？

### アダムとエバのようにならない

「アダムとエバはばかだな…」皆さんはそう思いませんか？ でも、彼らのような失敗を、私たちがしないとは限りません。ですから、どうして彼らが失敗してしまったのかを知ることが大切です。エバは神様の言葉よりヘビの言葉を信じてしまったのです。また、アダムは直接、神様の言葉を聞いていたにも関わらず、その通りにしなかったのです。私たちは、悪魔の誘惑から逃れることはできません。でも、誘惑されても、それに打ち勝つことが出来るのです。悪魔は、私たちに「聖書の言葉なんて、本当じゃないよ」と心に語りかけてくることがあります。もし、悪魔の誘惑に乗せられて、神様を疑うなら、アダムたちと同じ失敗をしてしまいます。

### まとめ

ですから、神様の言葉をよく聞きましょう。そして、それを疑ったり忘れたりしないで、いつも神様の言葉を信じて進んで行きましょう。

♪ここにあるよ♪ (イン 96)

# 聖書 創世記3・6・19 テーマ 罪の結果

## 序論

(金井信生)

主の言葉に従わず、自分の思いのままに行動した人と女に大きな変化が起きました。すぐに心に起こった「恥ずかしい」という気持ちと、やがてあらわれる「死」です。どちらも神との関係が断たれたことの結果でした。

## 一、身を隠す者に

禁じられていた木の実を食べてしまった二人は、主の歩まれる音を聞いて身を隠しました。さらに「あなたはどこにいるのか」との主の呼びかけに、「わたしは裸だったので、恐れて身を隠したのです」と答えました。

ここには神との関係が断たれた結果として、人は「裸」、「恐れ」、そして「身を隠す」三つのことを感じています。今までも「裸」でしたが、罪を犯してからは、裸であることを恥じ、恐れるようになりました。自分を守っておられる主への信頼を失い、主に見られて困る部分があ

ることを意識するようになったからです。これはそのまま、他人との関わりにおいても、互いの信頼を失い、自分の姿をそのまま見せられない関係になりました。

へびの言葉どおり、禁断の木の実を食べた後に「善悪を知る者」となりましたが、善悪を知るだけで、これを治めて、悪を遠ざけ、善に進む力はありません。また悪を行った結果の罪を始末することもできません。

へびは「決して死ぬことはないでしょう」と言いしました。木の実を食べてすぐに二人が死ぬということはありませんでした。しかし、確かに死は入り込みました。命の源であり、体だけでなく、心も霊も養い守られる主との関係が断ち切られたからです。

## 二、「死」が入り込む

「死」とは、呼んでも答えが返らず、自分の意思で自分の体を動かせない状態です。人は罪を犯した結果、神との交わりを失い、他人との関係も乱れ、自分自身を正しく治めることもできなくなりました。

主が「これを食べてはならない」と命じられたのは、木の実に毒があるからではなく、神と人との関係を正し

く保つために境界を定めるためでした。

人が神のようになろうとして、この境界を踏み越えてしまったとき、神との関係を失うだけでなく、自分が何者であるのか、どこから来てどこへ帰るのかということを見失ってしまいました。木の実を食べて、すぐに死んだではありませんが、死に向かって滅びの道を転がり落ちる者となったこと、それが主の告げられた「きつと死ぬ」ということでした。

### 三、責任を認めない

神との関係を失った人は、共に神の前に歩み、神の御旨のままに互いを愛し合って生きるはずだった、人との関係も失いました。「あなたは取って食べたのか」と問われても、自分が犯した罪を認めることも、責任を負うこともせず、「わたしと一緒にしてくださったあの女が」と、責任を女に、さらには女を与えた神に転嫁しようとしています。先には「わたしの骨の骨、肉の肉」とまで喜んでいましたが、神に支えられない人間の愛のはかなさがよく表れています。

後に人と女は、息子が与えられますが、兄のカインが

弟のアベルを殺すという、大きな痛みを経験します。善悪を治める力がなく、責任を負おうとしない罪の性質そのものを、自分たちの歩みを鏡に映すように見せられることになりました。

主なる神は、へびに、女に、そして人にそれぞれのさばきを下されました。「罪を犯した者は、その者が死ぬ」(新改訳 エゼキエル18・4)との原則は、はじめから示されています。額に汗して働き、また人間関係の破れに直面し、生きていることの辛さを経験しなければならぬ、そこにも死の力が及んでいます。

人が罪を犯してからの度々の主の言葉は、人に痛みをもたらししました。しかし、主は切り捨てたためではなく、人に罪を自覚させ、救いを求めさせるために、愛をもって呼びかけ、あえてきびしくさばいておられるのです。

### 結論

罪を罪としてさばき、ひとりの魂も滅びることを望まれずに救いの手を差し伸べておられる主の前に、自分の罪の真相を認めて、そのままで近づき、み言葉に従って命の道に歩みましょう。

## 研究資料

(井上義実)

先週に続いて、エデンの園で起った、人間の陥罪かんとの記事である。

## テキスト

**6 食べるに良く、目には美しく、賢くなるには好ましい** 食べるに良いという思いは、食欲という肉欲に働きかけた。目には美しいという感情は、所有欲、独占欲に働きかけた。賢くなるだろうという感覚は、傲慢な思いからの名誉欲に働きかけた。エバは悪魔の声に耳を傾け、心を動かされた。今まで目にしていても、さほど気にならなかった実を新たに眺めた。その実に手を伸ばし、口に運んで食した。罪に至る誘惑は、自制心をマヒさせるほど強く感情に働く。罪を実行するまでには幾つかの段階がある。エバはアダムにも実を食べるように勧めた。罪は次の罪を生み出していく。

**7 ふたりの目が開け** ヘビが言ったように、即座に死ぬことはなく、アダムとエバの目は開かれた。しかし、二人は神のようになったのではない。二人が最初に知ったのは、罪と恥である(先週に同じ)。二人が今まで裸で

あったのは、神との間の隔ての無さを表している。裸でありながら、男女の性的な差異があっても、恥ずかしさや欲望を感じなかった。それ以後の関わりとは違うきよい交わりが、男女間にあったことを示している。対神、対人それぞれの関わりは、現在とは異なった形の親しさであった。二人は、いちじくの葉をつづり合わせて腰に巻いた。この行為は、手近なもので罪を覆い隠そうとする人間の本性を表わしている。

**8 日の涼しい風の吹くころ** 夕方を表す慣用句である。ユダヤ人は古代、昼を四つの時に分けたが、第三の時である午後三時から六時に当たる。海から陸に向けて強い風が吹く時間帯である。**神の顔を避けて、身を隠した** 神の顔という表現に、神の人格性を見ることができる。顔と顔を合わせるといふ、個人的な対面を神は望まれている。罪は神から人間を遠ざけ、神との交わりを分断させるものである(イザヤ59・2)。

**9 あなたはどこにいるのか** 神は、身を隠した二人がどこにいるのか解らないお方ではない。二人が神に対して、明白に応答するように求めておられるのである。今まで、「はなはだ良かった」(1・31)という完全な調和

があつたが、人の不服従によって打ち消されてしまった。神の痛みと悲しみの響きが伴う言葉である。

**11 あなたは取って食べたのか** 木の実を食べる以前は、裸であることさえ知らなかったアダムである。全知である神は、何があつたのかをすべてご存知であつた。神の質問の意図は、アダムが罪を認め、罪と向き合うことにあつた。アダムは、自分が犯した罪の責任を負おうとはしなかった。

**12 わたしと一緒にしてくださいあの子** このできごとの責任は、エバを造り自分に与えた神にあり、エバが誘惑に負けたことにあると、アダムは不平を述べる。

**13 へびがわたしをだましたのです** エバには悪意をもって自分に近づいたへびの意図を十分に知る力があつた。エバはへびの言葉を否定し、へびを退けるべきであつた。ただへびにのみ責任を負わせることはできない。

**14 最もおろわれる** 14節以降には、神に背いて神の命令に従わなかったへび、エバ、アダムへの処罰が語られる。へびは賢さを誇っていたが、賢さを悪事に利用したことによって、わざわざいのちを受けけるものとなった。腹で、這いあるき おろわれる以前は足があつたという

ことなのか、どのような移動をしていたのかも解らない。以前はどうであれ、現在のように身をくねらせ、腹で地面を這うという姿にへりくだらせられた。**ちりを食べる** 実際にちりを食物とするということではない。へりくだらせられるという慣用的な表現である。ちりをなめる、という語句も同義的な表現である(詩篇72・9他)。

**16 産みの苦しみを大いに増す** 他の動物と比較して、人間は二足歩行のゆえに最も難産である。エバは命の木の実をも食べようとしたかも知れない。新たな命を生み出すために大きな代償を払わなければならなくなった。**あなたは夫を慕い、彼はあなたを治める** エバが神に背いたことは、神よりも上に立とうとした傲慢(ごうまん)であつた。支配したいと願つたエバは、支配される側に立たされた。**17 地はあなたのためにのろわれ** エデンの園では、労働は神への喜びの献(ささ)げものであつたが、今や、日々の糧を得るために、苦役さえ覚えるものになってしまった。**19 土に帰る** 神への背信、不服従は、労働の困難さのみならず、死という最大の代償を支払うことになった。**参考図書** 4月23日分の他、B・F・バックストン『創造と墮落』等。



## 聖書

創世記3・6、19、ローマ6・23

## タイトル

どうするの？ あなたの罪！

## 暗唱聖句

罪の支払う報酬は死である。

ローマ6・23

## 目 標

罪の結果の恐ろしさを知り、罪を悔い改める。

## 導入

(和田 治)

皆さん！ 覚えてますか？ 先週は、二人に注目しましたね。神様の言葉よりヘビの言葉を信じてしまったエバ。直接、神様の言葉を聞いていたのに、その通りにしなかったアダム。皆さんはこの一週間、神様の言葉をよく聞き、信じて進んで来れましたか？ さあ、今日はその続きです。二人のその後の姿は、罪を犯すことがどれほど恐ろしいことを私たちに示していますよ！

## 罪の結果、死が…！

二人は、罪を犯す前は、神様と親しく過ごしていました。お互いの間にもなんの壁もなかったのです。裸でしたが、恥ずかしくありませんでした。ありのままの姿で生活できたのです。でも、罪が入ってから二人は、あんなにも親しくしていた神様が恐くなってしまったのです。そして神様から隠れるようになりました。お互いもとても仲良しだったのに、アダムは自分の罪をエバのせいにしています。互いを思う愛が壊れたのです！

皆さんは、自分が悪いことをした時、お母さんや先生が恐くなり、ちゃんと顔を見て話せなくなったことはありませんか。また、嘘やいじわるという罪によって、友だちと仲が悪くなってしまうことがありますか。罪は神様との関係も人との関係も壊してしまうのです。

神様はとても厳しいお言葉を、二人にかけておられます。そうです、生きる「苦しみ」が罪によって入って来ってしまったのです。さらに、罪を犯す前は、アダムもエバも死ななくても良かったのに、罪を犯したために、死ななければならなくなったのです。

今朝の暗唱聖句は「罪の支払う報酬は死である」です。仕事をすると、その代わりにもらうのが「報酬」です。罪を犯すと死をもらうのです。アダムとエバは、罪を犯したことで死ぬことになりました。私たちも同じです。身体の死だけではありません。罪のために神様の愛、祝福が、一部しか心に届かなくなってしまうのです。

なにも親しくしていた神様が恐くなってしまったのです。そして神様から隠れるようになりました。お互いもとても仲良しだったのに、アダムは自分の罪をエバのせいにしています。互いを思う愛が壊れたのです！

5月

## 7日 礼拝メッセージ例

さらに、もつと恐ろしいことに、たましいも死を味わうことになったのです。身体の死が第一の死、そしてたましいの死が第二の死です。第二の死は、神様がおられない永遠の滅びの世界に堕ちていくことです。決して天国に行けません。何と恐ろしいことでしょうか！

### 私たちにも罪が……

「これはアダムやエバのお話でしょう？ 私たちには関係ない！」いえ！ 皆さんが毎日飲む水は、浄水所で綺麗にされて送られて来ます。もしも浄水所に毒が入れたらどうでしょう。そこから流れて来るすべての水は、飲むことが出来なくなりますね。それと同じように、最初の人間であるアダムとエバの失敗によって、私たちすべての人の中にも罪が入ってしまったのです。ですから、私たちは生まれた時から罪を持つ「罪人」となっていました。その罪をそのままにしていたら、第二の死が待っています。永遠に滅んでしまうのです！

### 罪を悔い改めよう

実は、神様はアダムとエバの失敗の時からすでに、御自分のひとり子イエス様によって人間を罪から救うことを計画されていました。どうやって？ イエス様を十字

架につけて、全ての人の罪を身代わりに負わせて、罰を受けさせるのです。罪の罰を一人一人が受けるべきなのに、代わりにイエス様が受けて下さいました。

イエス様を「わたしの罪のために死んでよみがえって下さった救い主」と信じた人の罪は、必ず赦されます。他に赦される方法はひとつありません！ 罪を悔い改め、イエス様を信じてこそ、罪が赦され、天国への道が開かれるのです。「それなら安心して罪を犯せる！」待った！ とんでもない！ アダムとエバの姿を見れば、罪を軽く見ることはできませんよね。罪の支払う報酬は「死」なのです。悔い改めるとは、罪をお詫びして心を神さまに向けることです。そうすれば、どんな罪も赦され、神様の愛、祝福が思う存分注がれるのです。

### まとめ

あなたはもう罪を悔い改め、イエス様を信じましたか。なら、もう罪は赦されています。もしまだなら、今日、その罪を神様にはっきりと悔い改めようではありませんか。そして赦された喜びをもって神様に心から感謝し、イエス様に従いましょう！

♪神さまの声きこえるかい♪ (イン84)

# 聖書 出エジプト記20・12～17 テーマ 父と母を敬え

## 序論

(石田高保)

人間が生まれてから最初に持つ人間関係は、通常は親との関係です。特に乳幼児期に親との健全な人間関係を持つことは、基本的信頼感を養う上で極めて重要であることが知られています(エリク・エリクソン)。この期間に受けた影響は、良かれ悪しかれ生涯に及ぶようです。昔の人もこのことに気づいており、それゆえ「三つ子の魂百までも」と表現したと思われる。

## 一、親を敬うことの祝福

〈あなたの父と母を敬え〉、敬うとは、その人を重く見ることです。またこれには「おそれる」という意味もあり(レビ記19・3)、神は子どもをこの世に送り出すためにその両親を用いられます(ヨセフとマリヤもしかり)。その意味において、両親にとって子どもが神からの賜物であるのと同様に、子どもにとっても両親は神からの賜物です。それゆえに両親はその性格と行状いかに関わらず、敬われなければならないわけです。

〈長く生きるためである〉、祝福の約束が伴っています。

実際問題としても、親の言葉によく従う子どもは、そうでない子どもに比べてより危険を避け、概して賢明な選択をし、心配は少なく、その結果、長く生きる可能性が高いと言えます。また親に従うことを身に着けた子どもは、神に従うことを身に着けやすいようです(箴言22・6)。ですからこのみ言葉は、単なる長生きを約束しているだけではなく、永遠の命を持つことまで約束していると言えます。父母を敬うこと、また親がそのように導くことは、子どもの信仰の継承に不可欠の要素なので、単なる親孝行の勧めではありません。

ではこのみ言葉は、新約ではどのような反映されているでしょうか。イエス様は明らかに両親を敬い、彼らにお仕えになりました(ルカ2・51)。十字架の苦しみの中でも母マリヤへの配慮を忘れませんでした(ヨハネ19・26～27)。

## 二、親を敬えるように育てる

父と母を敬うようにとのみ言葉は、子どもが親を重んじて、従うように命じているわけですが、それに関連して、そのような子どもに育て導く責任はその親にあるこ

とも聖書は明言しています。「父たる者よ。子どもをおこらせないで、主の薫陶と訓戒とによって、彼らを育てなさい」(エペソ4・6)、ここでの呼びかけが「母たる者よ」でないことに注意したい。聖書では子どもへの教育の第一の責任は父親であることが繰り返し明記されています。日本の生活史においても、母親が教育の責任を持つようになったのは、高度経済成長期からであるとも言われます。それは父親の家にいる時間が職場によって奪われるようになったことが主因のようです。それまでの日本社会は、原則として父親が家長として子どもたちの教育の責任を負っていました。それは聖書の価値観に通じるものです。ですからクリスチャンの父親は、自分の時間をやりくりして子どもへの教育に関わることを考えてみたい。その場合の関わり方は、子どもを怒らせない、イライラさせない、つまりその子の主体性を重んじるということでしょう。親として無数の失敗を繰り返すかもしれないませんが、関わりうとすること自体が、子どもとのきずなを深めることになるのではないのでしょうか。

また「主の薫陶と訓戒とによって、彼らを育てなさい」親が孤軍奮闘するのではなく、主が共に働いてくださり、主

が育てて下さるという信仰に立つのです。実は親にも教師にもできることは限られています。あとは神さまと子どもに任せるのです。その祝福はその子の生涯に及ぶ手ごたえのあるものとなります。「子をその行くべき道にしたがって教えよ、そうすれば年老いても、それを離れることがない」(箴言22・6)などは、その代表的なみ言葉でしょう。

これまで見てきたように、養育期間にある子どもは親を敬い、その指導に従うように言われています。しかしいったん結婚するならば、「人はその父と母を離れて、妻と結び合い、一体となる」(創世記2・24)わけですから、第一にすべき人間関係は親から夫(妻)に替えることになります。配偶者を二の次にし、親子関係優先させると夫婦関係に深刻な問題を引き起こすと言われます。それでも今日のみ言葉どおり、親との交わり、援助などは保たれるべきです。

### 結論

子ども時代に親をどう敬うか、あるいは敬わないかはその後の人生に強い影響を及ぼす選択となります。ですから私たちは自分の子どもに、C Sの生徒に親を敬うことの大切さとその祝福を折々に語ってはどうかでしょうか。

## 研究資料

(金井由嗣)

## 「母の日」の今日的意義

「母の日」の起源は20世紀初頭、アメリカで一人の女性が母の記念日に教会で記念会を開き、出席者に白いカーネーションを贈ったことに始まる。記念された亡き母アン・ジャービスは南北戦争中に敵味方を問わずすべての傷病者の看護をする運動「マザーズデイ・ワーククラブ」を始めた女性で、母としての愛をすべての人に注ぐことを提唱した。キリスト教人道主義に基づく、古き良きアメリカの「母」を記念する行事である(『21世紀教会学校ハンドブック』、英語版ウィキペディア参照)。

家庭の崩壊が進んでいる今日、母親に感謝することのできない子どもも多く存在する。母親がいること、子どもにとって良き母親であることを当然の前提として母の日を祝うことが、ある子どもたちを傷つけることになりはしないか。注意深く、また母の日が持つ本来の意義を大切に、この日の教会学校礼拝を守りたい。

宗教改革以来、プロテスタント教会は司祭(牧師)の結婚を認め、結婚をサクラメント(聖礼典)ではなく神

の創造の秩序に基づくものと位置づけることで、普遍的な家庭の価値とその中で家族のそれぞれが果たすべき役割を聖書から学んできた。家庭での礼拝、祈り、聖書を読むことを重んじてきたピューリタニズムと敬虔主義の伝統がもたらした「良き母」たちの生きた証しが「母の日」運動の背後にある。

家族は、その構成員各々について、また全体として、生まれながらにしては罪の支配のもとにあり、イエス・キリストの救いを必要とする。クリスチャンホームであつても例外ではない。神様が「良きもの」として創造された家庭が互いを傷つけ合う場所となつてしまう罪の現実を認めた上で、福音によつて救われ「神の家族」とされた教会が、家族の救いとみことばに基づく祝福された家庭形成の希望を伝える「恵みのことば」を持つ必要がある(近藤勝彦『キリスト教倫理学』第7章「結婚と家族の倫理」参照)。

## 文脈

この箇所は、十戒の後半、隣人との関係に関わる部分である。母の日礼拝との関係では、2つの点に注意する必要がある。(1)神の救いの業が先行し、恵みによつて神

の民とされた人々に対する命令であること。福音による新生抜きで、心から律法を守ることはできない。それ故、神に関する戒めが語られた後で隣人に関する戒めが与えられるのである。(2)両親に対する関係が対人倫理の第一に来ること。神が創造のはじめに人間を「男と女とに」創造し、「産めよ、増えよ」と命じられたのだから、創造の秩序において対人関係の第一に家族が来るのである。

## テキスト

12 あなたは父と母を敬え 対人関係における命令の中で唯一の肯定命令であり、断言的に与えられている。神の命令は「もしあなたがとって良い両親であれば」敬え、というのではない。神が創造された秩序のゆえに、無条件に両親を敬うことが求められている。ルターとカルヴァンは共に、教理問答の中で「神を畏れるが故に両親を敬い、両親の命令に従う」ことを教えている。また両者ともに、この戒めが家庭内に限定されるのではなく神が創造において定めたすべての秩序に、「神のゆえに」従うことを含んでいると理解している。そのための肯定命令であり、神が創造された秩序に反する行為が次節以下で禁止されているのである。これは、あなたの神、主が

賜わる地で、あなたが長く生きるためである この約束は、両親を敬うことが個人的長寿をもたらすという呪術的・現世利益的な教えではない。神に「親として」召されて自分の誕生の直接の原因となった両親の存在に感謝し、「子として」の召しにおいて両親を敬い従うことが、自分の人生を感謝して受容するための土台であることを教えているのである(近藤由美『新・親との関係を見つめる』参照)。また年長者を敬うことが習慣化した社会は、自分が高齢になった時に住みやすい社会であることは言うまでもない。エペソ6・2ではこの命令が「約束を伴う最初の掟(新共同訳)」として引用されている。律法は人を縛るためではなく、幸福にするために与えられている。福音によって新しく生まれた人は、神のみことばに喜んで従い、永遠の命の喜びを抱いて地上の人生を幸福に生きることができる。

参考図書 『21世紀教会学校ハンドブック』、近藤勝彦『キリスト教倫理学』、近藤由美『新・親との関係を見つめる』、ルター『小教理問答』、カルヴァン『ジュネーブ教会信仰問答』、R.A.ノール(ティンデル)、B.S.Childs(OTL), V.P. Hamilton (Baker).



## 聖書

出エジプト記20・12～17

## タイトル

あなたの父と母を敬え

## 暗唱聖句

あなたの父と母を敬え。

## 目 標

両親を敬い、大切にする。

出エジプト20・12

## 導入

(後藤 真)

「お父さんとお母さんを大切にしましょう」

「はい、分かりました！」

これで今日のお話はおしまいです。ただし、ほんとうにお父さんとお母さんを大切にできたらしです。

母の日や父の日には、少しは感謝するかもしれません。でも、ふだんはどうでしょうか。わたしたちが大人になって、お父さんとお母さんがおじいちゃんとおばあちゃんになり、手助けやお世話がいるようになっても、大切にできるでしょうか。「父と母を敬いなさい」ということを教えているのは聖書だけではありません。だれでも分かっていることなのです。でも行うのはとてもむづかしいことなのです。

## 十戒

今日のみのことばは、神様がイスラエルの民に教えた大切な教え、十戒（じっかい）の中に出てきます。「父と母を敬え」の他にも、盗んではならないとか、殺してはならないとか、当たり前だと思えるようなことばが並んでいます。

でも、神様はイスラエルの民に十戒を教えなければならなかったのです。イスラエルの民は長い間エジプトで奴隷になっていました。それで、エジプトの王様の命令で働くという、奴隷の生き方が染み付いていたのです。でもこれからは違います。エジプトを出て約束の地に入り、新しい国を作るのです。エジプトの王様に従う奴隷の生き方から、まことの神様に導かれ神様といっしょに生きる新しい生き方に変わるのです。十戒は、そんなイスラエルの民に、神様が教えてくださった新しい生き方のてびきでした。

エジプトでは、まことの神様を礼拝するやりかたも分からなかったでしょう。安息日に休むこともできなかったでしょう。嘘をついたり、盗んだりする人もいたかもしれません。お父さんとお母さんも、大切にされてい

5月

# 14日 礼拝メッセージ例

かったかもしれません。神様は、そんなイスラエルの民の姿を見て、十戒を与え、「父と母を敬え」というあたりまえのことを大切にするように教えたのです。

わたしはどこから？

「お父さんとお母さんが立派だったら自然に敬うのになあ。礼拝から帰る車の中で時々ケンカしているし、お母さんは勉強しなさいってうるさく言うし、お父さんは休みの日はゴロゴロして何もしていないし、あまり敬えないなあ」なんて思う人もいるかもしれません。（この原稿を書いている）わたしも父親なので子どもにそんなふうに言われるとドキッとします。子どもに尊敬されるような父親にならなければなあ、と反省します。

でも、神様はお父さんとお母さんが立派だから敬いなさいと教えているわけではありません。わたしたちが生まれたのはお父さんとお母さんがいるからなのです。そしてお母さんのお腹の中でわたしたちを造ってくださったのは神様です（参考・詩篇139篇）。神様がお父さんとお母さんを選び、わたしたちのお父さんとお母さんにしてくださいました。その神様の思いを受け止めて、お父さんとお母さんを敬うのです。

おとしよりが大切にされる国

「父と母を敬う」という教えには、続きがあります。それは「これは、あなたの神、主が賜わる地で、あなたが長く生きるためである」です。これはどういう意味でしょうか。

イスラエルの民の中に、お父さんとお母さんを大切にすることが広まるとします。すると、イスラエルはおとしよりが大切にされる国になります。自分が年を取ったときにも子どもたちが大切にしてくれるので、長生きしやすくなるのです。

父と母を敬うということは、神様を大切にすることということであり、自分のいのちを大切にすることにつながります。神様はわたしたちが幸せになるように願って、このことを教えています。そんな神様の気持ちを思いながら、もういちどみなさんでみことばを読んでみましょう。

「あなたの父と母を敬え」

アーメン！

♪すばらしい神様♪（PW23）

# 聖書 マタイ5・1～12 テーマ さいわいな人

## 序論

(高橋頼男)

幸いを求めない人はいません。誰もが幸いになりたいと願い、自分の思い描く幸いを得るために懸命です。今日まで著名な「幸福論」がいくつも世に出て、人間の幸福について論じられ、問われてきました。旧約聖書の詩編にも有名な幸い論が出てきます(詩篇1・1、詩篇32・1～2)。

ここにはイエス・キリストの幸い論があります。しかし、主イエスの幸い論は、万民に語りかける教訓や垂訓、教えの類いではありません、それは明確な説教なのです。イエス様は、ここで〈弟子たち〉と〈群衆〉に向かって八つの幸いについて語っておられます。イエス様の幸福論はまことにユニークです。人が考える幸い、この世の期待する幸いとは全く違っており、まさに真逆をいくものです。世の基準ではとても測れず、むしろ不幸とかわれていることが幸いのしるしであるかのようにです。その理由は、主はこの世ではなく神の国の幸い、神の国の民

とされた者の幸いを語っておられるからです。それは人間的幸福(幸福感・満足感)ではなく、神による祝福です。この幸いは主の弟子たちへの説教として語られています。神の国に生きる彼らの幸い為何であるかが語られています。また、主は群衆に向かって語っておられます。真の幸いについて改めて問い直し、深く考え、日ごろ漠然と考えている幸いがいかにもろく根拠の乏しいものであるかということに気付かせ、彼らの目を開き、神の国の価値観、人生観、世界観へと導くための説教なのです。

## 一、心の貧しい者の幸い(5)

最初に出て来る幸いは、心の貧しい者の幸いです。心の貧しさの幸いは、主イエスの語られる幸いの原型です。まず、心の貧しい者こそ幸いな人なのです。愛の無い、自己中心な人というのではなく、むしろ神の前にへりくだった心砕かれた人のことです。他の一切のものによらず、神のみに依存し神に信頼する人です。なぜ、「心の貧しい者」が幸せなのでしょう。それは天の御国が、すでにその人のものになっているからです。「天の国」「神の国」とは支配や統治、主権のことを意味し、その支配や統治が及ぶ領土、国をさします。「神の国」はすなわち、

神による支配、統治のことです。碎かれた心でへりくだって神に全く信頼している〈こころの貧しい人〉は、すでに神による恵みのご支配の中に生かされているのです。

## 二、悲しむ者、柔和な者、義に飢えかわく者、あわれみ深い者、心の清い者、平和を作る者の幸い(4～9)

悲しむ者がなぜ幸いなのでしょう。それは真摯に自分の罪を神の前に認め、嘆き悲しむ者を、神は必ず豊かに慰めてくださるからです。「神のみこころに添うた悲しみは、悔いのない救を得させる悔改めに導き」(Ⅱコリント7・10)ます。柔和な者がなぜ幸いなのでしょう。それは耐え忍ぶことによつて、〈地を受けつぐ〉すなわち、神の約束と賜物を得ることができ、御子の御姿に似た者とされるからです(ローマ8・29)。義に飢え渴く者がなぜ幸いなのでしょう。それは、神との正しい関係をひたすら求める者を、神は必ず義と認め、神のみ心にかなう歩みができるようにしてくださるからです。あわれみ深い人たちは神の義に生き、他者へのあわれみを大切にする人たちです。こころの清い者たちは、神に対して二心のない者たちです。平和を造る者たちは、神との平和によつて、人と

の関係において平和を作り出す人たちです。シャロームを生み出す者たちで、彼らこそ神の子と呼ばれるのです。

## 三、迫害される者の幸い(10～12)

主イエスは、〈義のために迫害されてきた人たちは、さいわい〉だと言われ、〈喜び、よろこべ〉とまで言われます。神に従う者が苦しみと迫害を経験することは当然のことなのです。しかも、そのことを喜びなさいと言われます。それは、苦難こそ神に従う者のしるしであり、神の国(神のご支配)がその人のものになっている証拠なのだからです。さらに、その時私たちは「地の塩、世の光」(13～14)としての使命を果たすことが出来るのです。そして、〈天においてあなたがたの受ける報いは大きい〉と断言していてくださいます。だから大いに喜ぶことができるのです。

## 結論

「なんと幸いな人たちでしょう、あなたがたは…」と言われる主イエスのことばは、この世ではなく神の国の幸い、神の国の民とされた者の幸いを語っておられます。神の国に生きる者とされている幸いを知り、恵みによつて積極的にこの幸いに生きる者とされましょう。

## 研究資料

(宮澤清志)

## テキストト

1 群衆 マタイ4・25に描かれた「おびただしい群衆」を指すものと思われる。イエスは、弟子たちばかりでなく、イエスに近寄ってくる群衆たちにも同じように神の言葉を語られた。山 この群衆を見て、イエスがなぜ「山」に登られたのかは記されていない。しかし、イエスにとって「山」とは、その節目節目において登場する重要な場所である(マタイ4・8、14・23、15・29、17・1、28・16他)。

3 12 ここに、本日の主題である「幸いの道」が示される。さいわい(ギ)マカリオス とは、単なる「幸せ」という意味とは異なる。この言葉は「神に祝福されている」という意味の言葉であり、それは、時間の変化、状況の変化などによって消滅したり薄められたりする類の幸福ではなく、何によっても消されることがなく、またこの世の何によっても取り去られることのない神の祝福の事実である。また、この個所は、一般に「八福の教え」とも呼ばれている(11、12節を入れると9つある)。しか

し、この「幸い」は、それぞれが切り離されて存在するのではなく、一つの「幸い」に見られる八つの側面という方がよりふさわしい。

3 こころの貧しい人たち この「貧しい」とは、徹底的に貧しい人のことをいう。「心の碎けた者」「たましいの悔いぐずおれた者」(詩篇34・18)に近い状態である。自分の内側により頼むべき何物をももっていない者のことである。このような者をこそ、神はご自分の民として迎え入れられるのである。

4 悲しんでいる人たち ここでは、何を、どう悲しんでいるのかは説明されていない。しかし、聖書に示される「悲しみ」とは、「この世が神を失っていること」に起源を発している。神に反逆しているこの世界や、罪に沈んでいる人間に対する「悲しみ」である。このような者たちに必要なものは「慰め<sup>なぐさ</sup>」である。

5 柔和な人たち この言葉は、詩篇37・11の七十人訳聖書からの引用であるが、この詩篇では、柔和な人の特徴をいくつかあげている(怒りをやめ、憤りを捨てること。耐え忍ぶこと。主を待ち望むこと。等)。何よりも主イエスこそが「柔和なおかた」と呼ばれている(マタ

イ21・5)。そのような者たちに用意されているのは「新しい地」(Ⅱペテロ3・13等)である。

**6 義に飢えかわいている人たち** 義とは、神のご性質の中心をなす言葉であり、神が人のために備えられたものでもある。「救い」と置き換えてもいい言葉でもある。ここで、義に飢えかわくとは、神がキリストを通して人間に備えられる救いを熱心に求める人のことである。神はそのような人に救いを満たしてくださるのである。

**7 あわれみ深い人たち** あわれみとは「はらわたまで痛んで下さる神の愛」であって、他の人に対する具体的な行動へとつながる愛である。単なる同情や感傷ではなく、行動を伴うのである。そのようなあわれみをもって隣人に接する者は、あわれみを受けるのである。

**8 心の清い人たち** 「清い」という言葉は混じりけがないという意味を持つ。人間の最も奥深い部分まで純粹であることをさす。同時に「清い」とは「分かれたれない」という意味も併せ持つ言葉であり、「二心」でないことを指す(ヤコブ4・8)。そのような者に与えられた約束は「神を見る」であって、直接神とお会いするという約束である(Ⅰコリント13・12)。

**9 平和をつくり出す人たち** 平和とは「すべての被造物が、創造者との関係およびお互いの関係において、それぞれにふさわしい位置におかれること」である。人は、イエス・キリストを通して与えられる神の和解を受け入れ、和解の福音を携えて積極的に遣わされるのである(Ⅱコリント5・20)。

**10 義のために迫害されてきた人たち** 「義」とは、神が御国の民のために備えられた救いのみ業を指す。ペテロも「万一義のために苦しむようなことがあっても、あなたがたはさいわいである」(Ⅰペテロ3・14)と語っている。神はそのような人たちに、神の御国を約束されているのである。

**11・12** この箇所は10節の展開である。特に、これまで「彼らは」と三人称で述べられていたものが、この節では「あなたがたは」と二人称となっており、弟子たちがやがて「ののしり」「迫害」「悪口」に直面するであろうことを率直に述べる。しかもそれは「わたし(キリスト)のため」(11)のものである。

**参考図書** 中沢啓介「マタイの福音書註解」(恵友書房)、D・M・ロイドジョンス「山上の説教」(いのちのことは社)



## 聖書

マタイ5・1～12

## タイトル

ホンモノの幸せとは？

暗唱聖句  
 こちらの貧しい人たちは、さいわいである、天国は彼らのものである。

## 目標

真に幸いな生涯の秘訣を知る。

マタイ5・3

## 導入

(松浦みち子)

あるテレビのコマーシャルで「幸せって何だっけ、何だっけ」と歌っていました。胸に手を当てて私たちも「何だっけ」と一緒に考えてみませんか？ みなさんはどんな時に「うれしいなあ、しあわせだなあ」と思いますか？ お誕生日に欲しかった素敵なプレゼントをもらった時、テストで100点をとってお母さんに褒められた時、家族で海外に旅行した時など、いろいろあるでしょう。確かに、やったーって、最高に幸せな気持ちになりますね。でも、そんなに最高の幸せも時間がたつといつのまにかなくなってしまうませんか？ いつまでもなくならない幸せってあるでしょうか。

## 山上での説教

イエス様はある時、山に登って弟子たちにお話しをされました。イエス様はお話の中で「さいわいである」と9回も語っておられます。これを3つに分けることができます。一つ目は「心の貧しい人」「悲しんでいる人」「柔和な人」、二つ目は「義に飢えかわいている人」「あわれみ深い人」「心の清い人」、三つ目は「平和をつくり出す人」「義のために迫害されてきた人」「わたしのためにこのしられたり、迫害されたり、悪口を言われたりする人」、これらをみな、さいわいだと語られたのです。

「えー、どうして？」だって、豊かで大きな家に住み、たくさんのお金で何でも買える人、丈夫な体で元気に何でもできる人、そっちの方がぜったい幸せに決まってる、と私たちは思いますね。けれども、お金は使えばいつかはなくなってしまうし、どんなに良い物でも時間がたつと変わってしまいます。丈夫な体もいつか年をとって弱っていきます。

## ホンモノの幸せとは？

「こちらの貧しい人たちは、さいわいである」とイエス様はおっしゃいましたが、豊かな人のほうがさいわい

だと思っただけ……と、疑問に思いますね。

イエス様の語られたたとえ話からこのことを考えてみましょう。

ふたりの人が祈るために、宮にのぼって行きました。ひとりにはパリサイ人であり、もうひとりには取税人でした。パリサイ人は常日頃から、神様の律法を守って規律正しい生活をして、自分は義人だと思い込んで、他の人を見下げていました。いっぽう取税人は、ときには税金をこまかして自分のふところに入れてしまうようなこともあり、誘惑に負けてしまったことを後悔するような日々を過ごしていました。宮に入ったパリサイ人は胸を張って、ひとりでこう祈りました。「神様、わたしは他の人たちのような貪欲な者、不正な者、<sup>かんいん</sup>姦淫をする者ではなく、また、この取税人のような人間でもないことを感謝します。わたしは一週に二度は必ず断食をし、全収入の十分の一もきちんと献金しています」と。もう一人の取税人はどうでしょう。宮の隅の遠く離れたところで立ち、目を伏せ、悲しみのあまり胸をたたきながら、「神様、罪人のわたしをおゆるしください」と、うめくように祈られました。この二人に対してイエス様は、次のように言われ

ました。「神に義とされて自分の家に帰ったのは、この取税人であって、あのパリサイ人ではなかった。おおよそ、自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるであらう」(ルカ18・9～14)。

### ホンモノの幸せに生きよう

「心の貧しい人」とは、自分を低くする者のことです。自分は罪深く、誘惑に負けやすい弱い者であることを知っている人のことです。なぜ、このような人が幸せかというと、自分の力ではどうしようもないとわかって「神様、助けて下さい」と祈るからです。神様は、こういう人に知らんぷりをされません。必ず祈りにこたえて、罪をゆるし、心に平安を与えて慰め励ましてくださいます。神様と共に歩む日々ほど平安でしあわせなことはありません。だから、イエス様は「心の貧しい人たちは、さいわいである。天国は彼らのものである」と教えてくださったのです。いつまでも変わらないホンモノのしあわせは、天国の約束に裏付けられたものです。謙虚な心をもって神様に従い、ホンモノのしあわせに生きるものとなりましょう。

♪イエスさまにまさる♪ (ホ65)

# 聖書 マタイ5・13・16 テーマ 地の塩・世の光

## 序論

(金井信生)

イエスはクリスチャンを「地の塩、世の光」として評価し、また期待しておられます。

## 一、キリストが喜びとし誇りとしている存在

イエスは弟子たちに「地の塩、世の光」になりなさいと言われたのではなく、すでに「地の塩、世の光である」とおっしゃられました。これはイエスの言葉に従う私たちを、大いに尊んでおられる言葉です。

「塩(ソルト)」が語源となって「給料(サラリー)」という言葉ができたように、昔から塩は貴重なものでした。また「光」も庶民は特別なときでなければ手にしません。聖書でも花婿を迎えるときや貴重な物を探すとき、わざわざ「あかりを手にして、つけて」と記しているほです。今のように塩も光も当たり前の時代ではありません。

塩として光としてどう生きるべきか考える前に、素直

にまず、キリストが私をすでに認めてくださり、こんなに尊んでくださっていることを喜びましょう。

そして、どうでもいい者ではなく、この世に必要な存在として、自分に何が期待され、託されているのか、主の言葉に聞き従いましょう。

## 二、地の塩の存在

昔から「塩」が尊ばれたのは、塩にしかできない働きがあるからです。

まず、食べ物を保存し、腐敗から守ります。経験的に、塩には汚れたものを退け、清く保つことが知られており、魚や肉や野菜を保存し、冬や不漁不作など、収穫の無い時に備えることができました。

クリスチャンも、この世を清く保つために置かれている存在です。それも「地の塩」とあるように、目立つ飾り物ではなく、周囲に溶け込んで自分の姿を失いながら、なお塩気を失わないでいるのです。神から離れて汚れたり乱れやすいこの世にあって、流されることなく、神の清さ正しさに立っていくことです。

また、塩は食べ物に味をつけます。世界の歴史の中で、

文学や芸術、医療や福祉、教育や科学など、さまざまな分野にクリスチャンが大きな影響を与えてきました。人の持つ能力や賜物を引き出して、世の中を良くしていく、人生に彩りを与えることができるのです。

### 三、輝いて生きる世の光

「光」もなくてはならない存在です。

神ははじめに「光」を造り、今も世界を照らしておられます。ただ、神の光が届いていないのが、人の心の中であり、この世の中です。

イエスは「わたしは世の光である」（ヨハネ8・12）と名乗られます。神の存在を思い起こさせ、神のもとに立ち帰らせるための「命の光」です。か細い光、仮の光ではない、永遠にわたる光の源そのものがキリストです。

この方からクリスチャンは、「世の光」として任命されました。肝心な時に光らなかつたり、隠れこんでしまつたら、光としての役割を果たすことができません。

自分では光ることができない私たちですが、内にキリストをもち、またキリストの光に照らされ続けて、命の光を世に輝かせる者とならせていただいています。その

ために、日々言葉に養われ、育てられていくのです。

イエスは、私たちを世の光として「山の上にある」、「燭台の上において」と表現されました。光が大きい小さいかよりも、ゆるがない大きな存在に支えられているから、持っている価値を発揮することができるのです。

塩氣を与えてくださる神、私たちを命の光をもつて照らし、この世に掲げてくださっている主がおられます。塩や光は、この大きな存在を世に示すためです。人々があなたがたのよいおこないを見て、天にいますあなたがたの父をあがめるように」なるために、私たちは先に主の救いにあずかりました。主に尊ばれ、用いられていることを喜び、私が今ここに生かされているのは、主から託された使命を果たすためですと、喜んで主の恵みに歩みましょう。

### 結論

地の塩、世の光と評価されていることを喜び、主の恵みによつてますますその務めを果たしていこう。

## 研究資料

(宮澤清志)

主イエスから「幸いだ」と語られる御国の民は、この世においてどのような存在であるかを明らかにするため、イエスはこの教えを語られた。

## テキスト

13 あなたがたは、地の塩である この語は、他の並行記事には登場しない、マタイ特有の言葉である。ギリシャ語の語順も、あなたがたは が冒頭に置かれており、強調して「あなたがたこそ」と訳すべき言葉である。また、地の塩である という言葉にも注目したい。これは「地の塩にならなさい」という命令ではなく、約束の言葉でもない。天の御国の民は、既に、塩になっているのである。もし塩のききめがなくなったら： この文は、並行記事であるマルコ9・50とルカ14・34―35にも登場する。ききめがなくなるとは、直訳すれば、「愚かになる」という意味である。一般的に、塩には「腐敗を防ぐ、清める、味つけをする」等、様々な効能があるとされている。塩には少なくとも11の役割があると指摘する学者もいるが、ことさらにその中のどれかを強調し、聖書に読

み込むことはあまり意味がない。この個所はそのすべてを網羅すると考えられる。同時に塩には保存作用がある。キリスト者もこの世界が腐敗して破滅するのを防ぐ働きが求められているといえる。しかし、もしこの塩が、塩としての価値がなくなり、ただの塊となってしまったら、ただ外に捨てられて人々に踏みつけられる、すなわち役に立たないものとして破棄される、というのである。

14 あなたがたは、世の光である 前節同様、ここでもあなたがた が強調された文体となっている。世の光 ここでいう「世の光」とは、何だろうか。マタイの語る「世の光」とは、この山上の説教の直前の「暗黒の中に住んでいる民は大いなる光を見、死の地、死の陰に住んでいる人々に、光がのぼった」(4・16)のみ言葉のイメージを持っているのではないかと考えられる。そしてこのイザヤ書のみ言葉は、イエスによって成就したと考えているのであろう。とすれば、マタイの「世の光」の理解は、まず第一には、本来イエスご自身を指す言葉ではないかと考えられる。しかし、マタイはここで「あなたがたは」と付け加える。それは、キリスト者は、何らかの努力によって、自らが「世の光」となるのではないとい

うことを示すのである。キリスト者が「世の光」であるのは、この「わたしは世の光である」(ヨハネ8・12)と語られるお方を内に宿すことによって可能となるのである。

15 この箇所については、並行記事として、マルコ4・21、ルカ8・16、11・33がある。柵の下におく 当時、ランプを消す時は、吹き消すと煙つてくさいから、柵をかぶせて静かに消したそうである。このことから、通常考えられている「愚行」という面と、「輝いている火は消してはならない」という両面が考えられる。いずれにしても、キリストの火をいただいている私たち自らが、その火を消してはならないことを語っている。

16 あなたがたの光 ここでの「光」とは、自らを「光」と語られた(ヨハネ8・12)内住のキリストのことである。キリストを信じ受け入れた時、キリストの光を内に宿するのである。輝かし 日本語のもつ響きからは、人間の側でがんばって良い行いをするという意味に理解できそうであるが、より原文にふさわしく訳すと「光は輝けよ」「光に輝いていただけ」という訳となる。ここで大切なことは、人間の側では自然に輝く光を覆い隠してはな

らない、ということである。あなたがたのよいおこないキリスト者の善行は、内に住んでおられるキリストが輝くことによってもたらされる。よい(ギ)カロス) とは、単に良いということだけではなく、美しさ、魅力的、といったものも包含しており、多くの人々を引きつけるものである。それが御国の民の態度や行動である。天にいますあなたがたの父をあがめるように キリスト者は、この世から選び分かれた者である。それは、神の光をこの世に輝かすためである。キリスト者が神の光を輝かすのは、「天におられるあなたがたの父」があがめられるためなのである。

ところでイエスは同じ山上の説教の中で「人前で善行をしないように」(6・1、新改訳)と教えている。このことは、この箇所において語られた言葉と矛盾するのではないかと思われる方もいるのではないだろうか。しかし、両者の間には本質的な相違が存在する。6・1の教えは「人に見られるため」すなわち自分自身に栄光を帰するための行為であるのに対して、この箇所は神に栄光を帰するための行為なのである。

参考図書 5月21日分と同じ。



聖書

マタイ5・13〜16

タイトル

地の塩、世の光とされた恵み

暗唱聖句

あなたがたは、世の光である。

目標

地の塩、世の光として生きる。

マタイ5・14

## 導入

(飯田勝彦)

先週に続き、今日の個所もイエス様が弟子たちを中心に  
大勢の人たちに大切なお話をされたところです。

イエス様は、いつも私たちに生きる力をあたえるメッセ  
ージをしてくださいます。私たちのことを真剣に考  
え、励ましてくださるイエス様が共にいてくださるこ  
とは本当に幸いですね。

イエス様は度々、私たちがよく知っている鳥や花など  
の自然界のものや日常生活によく使うものなどを例えに  
してお話しをされました。今日の個所には、塩と光を用  
いてイエス様は、皆さんに素晴らしい生き方を教えてく  
ださいます。

## あなたは地の塩です

塩は、私たちにとって、とても身近な物ですね。イエ

スさまは、私たちが理解できるように生活の中にある物  
から、よくお話をされました。

イエス様は、弟子たちに「あなたがたは地の塩です」  
と言われました。今朝、皆さんにも同じように言われま  
す。これはどういう意味でしょうか。

塩は、私たちの生活には欠かすことのできない物で毎  
日たべています。でも、塩だけを食べる人はいないで  
しょう。「今日の朝ご飯は塩だったよ。」っていう人、聞  
いたことがありますか。

塩は多くの場合、料理の調味料などに使われます。塩  
気のない料理は、食べても美味しくありません。皆さん  
も自分の好みで塩を振ることがあるでしょう。でも、塩  
がメインではありませんね。塩は丁度良い塩加減になっ  
て初めて、料理を引き立たせるのです。塩は、縁の下  
の力持ちです。ですから塩はかたまりではなく、混ぜる物  
の中に溶けてこそ、その力を発揮します。

また、梅干や漬物、お正月に食べるかずの子などは、  
長くもつ保存食です。保存食には、たくさん塩が使わ  
れています。塩は物を腐ることから守る効果があるから  
です。

イエス様を信じるクリスチャンは地の塩として素晴らしい役割が与えられています。それは、生活の中で周りの人たちの中に溶け込み、その人の良い所を引き出していくのです。皆さんのイエス様の愛に生かされる姿を通して、クラスにいじめがなくなり、みんなが仲良くなっていくなれば嬉しいですね。それこそ、腐敗を防ぐ塩の役割です。

イエス様は、あなたに素晴らしい人生を約束してくださっています。

### あなたは世の光です

イエス様は「あなたがたは世の光です」と言われました。もし、光がなかったらどうでしょうか。周りは真暗で、学校や教会に行くのも大変です。

でも、光があればつまよう躓くこともぶつかることもありません。光があれば洗濯物はよく乾くし、電気も作れます。また、光は、植物が光合成をするためには必要です。私たちも光がなければ、健康でいることはできません。

そのように光とは、私たちの生活には欠かせないものです。でも、光は私たちの心にも必要です。真つ暗な心だと苦しく、人をも傷つけ暗い人生を送らなければなら

ません。私たちの心を照らし、救いへと導いてくださるのがイエス様です。イエス様は「わたしは世の光です」と言われました。光であるイエス様心に迎えている人は、人々に希望と救いを指し示す、永遠の光を持って歩むことができます。私たちは、光であるイエス様を多くの人たちの所にお連れする、世の光とされています。私たちを通して、安心して希望が与えられる人がいるなら、何と幸いなことでしょうか。

### まとめ

今、皆さんも学校やテレビなどで、悲しく辛いニュースをいっぱい聞くでしょう。でも、イエス様は、皆さんを、人を生かし希望を与える、地の塩、世の光として用いてくださるのです。素晴らしい人生をイエス様が与えてくださっていることを感謝しながら歩みましょう。

そして、神様は、皆さんを通して素晴らしい神様を証する者として用いて下さるのです。

♪ひかりひかり♪ (こ52、ホ109、ふ83)

# 聖書 マタイ5・43～48 テーマ 天の父の愛

## 序論

(福井文彦)

この箇所は、山上の説教の5・17～20の解説(適用)として、イエスが旧約の律法の中から引き出された六つの問題の最後です。その最後に、隣人愛を取り上げておられることは、決して無意味なことではありません。律法は、結局愛に尽きるからです。

## 一、敵を愛せよ

当時、律法学者やパリサイ人は、(「隣り人を愛し、敵を憎め」と教えていました。律法には「あなた自身のようにあなたの隣人を愛さなければならない」(レビ19・18)とはありますが、どこにも「自分の敵を憎め」という律法はないのです。

むしろ、「もし、あなたが敵の牛または、ろばの迷っているのに会う時は、必ずこれを彼の所に連れて行って、帰さなければならぬ」(出エジプト23・4～5)との規定がありました。ところが、律法学者やパリサイ人たちは、「隣人」を自分と同国人、つまり神の選民であるユダ

ヤ人に限定したのです。そして、ユダヤ人を愛し、異邦人は憎んでもよいと教えたのです。

しかし、イエスの「隣人」についての理解は全く違っていました。あの「よきサマリヤ人」のたとえ話によってもよくわかります。隣人とは人種差別を一切廃したすべての人であり、敵意とか好意を持っていることによって区別されないすべての人なのです。そのイエスが「敵を愛し、迫害する者のために祈れ」と教えられました。主が敵の中から特に「迫害者」を区別しておられるのは、他のどんな理由からの反対よりも、信仰のゆえになされる迫害が最も非情・苛酷だからです。

## 二、天の父の愛

イエスは(こうして、天にいますあなたがたの父の子となるためである)と言われました。私たちの敵をゆるし、迫害者のために祈ることによって、私たちが神の子とされるわけではありません。私たちは神の恵みとイエスへの信仰によって救われ、新しく生まれ変わり、神の子とされたのです。神の子は、愛なる天の父なる神に似るはずで、それゆえに、私たちが敵を愛する時、私たちはその愛の父にふさわしい者となるのです。

さらに、イエスは「天の父は、悪い者の上にも良い者の上にも、太陽をのぼらせ、正しい者にも正しくない者にも、雨を降らして下さるからである」と言われました。父なる神は善人と悪人を区別できないようなお方ではありません。悪い者と良い者を区別なさった上で、公平にすべての人を取り扱っておられます。ここに神の公平が神の義と愛に基づいていることを知ります。

イエスは、自分を十字架につけた人々を前に、「父よ、彼らをおゆるしください。彼らは何をしていたのか、わからずにいるのです」(ルカ23・34)と祈られました。ここに敵をゆるし、迫害する者のために祈られたイエスの愛を見ることが出来ます。主は私たち罪人のために十字架上で死んでくださったのであり、それはイエスをこの地上に遣わしてくださった神の愛なのです(ローマ5・8)。

### 三、人を愛する者

イエスは「あなたがたが自分を愛する者を愛したからとて、なんの報いがあるのか。そのようなことは取税人でもするではないか」と言われました。これは、どんなモラルの欠けた人でも自分を愛してくれる人を愛するこ

とはできるのだ、ということですが。しかし、私たちは隣人を愛することはなかなかできません。また、他人に害悪を与えられると黙っていられず、復讐しようという気持ちで湧いてきます。

その私たちに對して、イエスは「それだから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい」と語られました。この完全は、知恵や力の完全でなく、愛における完全、全き愛のことです。この完全をきよめ(聖潔)と言います。「敵を愛し、迫害する者のために祈れるのは神の愛によるのであり、キリストの心によるのであって、聖霊によって神の愛が心に注がれて初めてできることです(ローマ5・5)。そして愛の領域で完全になるとは、混じりけのない、平等や不公平のない、透明純粋な愛をもって生活し行動することができるようになることです。

### 結論

神と交わり、イエスの血によってきよめられ(Ⅰヨハネ1・7)、聖霊によって神の愛を注がれ、愛が全うできる者を目指しましょう。

## 研究資料

(宮澤清志)

先々週から、「山上の説教」の前半部分が取り上げられている。紙面の関係で、緒論的な事柄は割愛してきたが必要であると考え、山上の説教の緒論的なことを少し見とおきたい。

マタイは、その福音書の中で、イエスが教えたことを5つの箇所にとまとめた。その中の一つが「山上の説教」である(あとの4つは10章、13章、18章、24・25章である)。マタイは、大宣教命令をもってこの福音書を締めくくる。マタイは、イエスの大宣教命令の中の「あなたがたに命じておいた小さいこと」(28・20)を、この5つの箇所に「イエスの教え」という形で集めたのである。

さて、この箇所は、21節から始まる一連の流れの中にある。これは、「『』と言われていたことは、あなたがたの聞いているところである」(21、27、33、38、43)と、律法の伝承を取り上げて、「しかし、わたしはあなたがたに言う」と、その伝承を否定し、イエスの新しい光の中でこの律法を解釈して見せたのである。

## テキスト

**43 隣り人を愛し、敵を憎め** 前半部分の「隣り人を愛し」という言葉については、レビ19・18に言及されている。この戒めは、主イエスにとって、神に対する愛の戒めとともに最も重要な戒めとされている(22・34以下)。しかし、後半部分の「敵を憎め」という記述は、聖書をはじめ、ユダヤ教文献のどこにも見いだされてはいない。しかし、ユダヤ人たちに「敵を憎めとあなたがたは聞いています」と語ったイエスの言葉に対して、群衆やユダヤ人たちは反論していない。また、当時のユダヤ人社会の教えや文献からして「隣人」とは、同胞であるユダヤ人だけを指すと解釈し、他のあらゆる民族を、異邦人であり敵であると思え、と解釈できるようである。

**44 イエスがその御国の民に命じられた言葉である。敵** 直訳は「あなたがたの敵」であるが、「あなたがたから見の敵」というよりはむしろ「あなたがたを敵と見る人々」という意味であろう。御国の民には「敵」はいない。いるのは自分たちを「敵」と見る人々である。愛し感情的なものであるというよりは、むしろ強い意志を伴ったものである。**迫害する者のために折れ** ここに用

いられている二つの動詞は現在形で書かれている。ここでは、一般論としての命令ではなく、具体的な人々を想定して語っているようである。

45 こうして この接続の言葉と以前からのつながりによれば、敵への愛や迫害に対する祈りの結果神の子とされる、かのような誤解を抱く恐れもある。しかし、そうではない。むしろ、この「こうして」とは結果を表す。神の子とされた者は、その結果、そのしるしとして敵への愛や迫害者に対する祈りへと導かれる、というのである。天の父は、悪い者の上にも良い者の上にも、太陽をのぼらせ、正しい者にも正しくない者にも、雨を降らして下さるからである。人間に対する神の働きは、人間の何かによって条件付けられるのではない。しかし、このことはユダヤ人たちには信じがたいことであった。なぜなら、契約の民であるユダヤ人は、神から特別扱いされていると信じていたからである。それは同時に、因果応報という考えを根底に持つ日本人と日本人キリスト者に対するメッセージでもあろう。

46～47 ここに「取税人」と「異邦人」とが道徳的に一段低い存在として例示されている。これは、もちろんイ

エスご自身が彼らを軽蔑したというのではなく、当時のユダヤ人の間における常識的な見解を採用したのであろう。**あいさつ** 単に挨拶を交わすというのではなく、挨拶をする相手に神からの祝福を祈る祈りが含まれる。

48 この箇所は、第一義的には今回取り上げた43節以降の結論部分といえることができる。しかし、それ以上にこの箇所は21節以降の締めくくりの御言葉として読むことができる。その鍵となる言葉は「完全」という言葉である。ちなみにこの言葉は、並行記事のルカ6・36では「慈悲深い」と訳されている。しかし、マタイがここでいう「完全」とは、マタイの文脈から理解すると、人を差別することなく愛する、という意味に解することができる。この箇所は「愛」の対象としての「隣人」を定義づけているのである。その隣人に対して45節にあるように、公平に愛を注ぐという意味での「完全」を意味しているのである。なぜならば、それは「天の父」がそうであるからである。

参考図書 5月21日分と同じ。



聖書 マタイ5・43～48

タイトル 新しい恵み

暗唱聖句

天の父は、悪い者の上にも良い者の上にも、太陽をのぼらせ、正しい者にも正しくない者にも、雨を降らして下さるからである。

マタイ5・45

目標

天の父なる神の愛を知り、どんな人をも愛する者となる。

導入

(飯田勝彦)

6月に入り梅雨の時期になりました。過し難い日が続くと、何だか気持ちまでジメジメしてきませんか？ そんな日もありますよね。「今、ぼくの心はジメジメしてる」、「わたし最近、心が晴れないんです」と正直な気持ちを話せるの良いですね。イエス様は、あなたの心模様をすべてを知って静かに見守っておられます。

今日は「敵を愛しなさい」という何だか難しそうなお話です。でも、ここに大きな恵みがあります。

新しい恵み

5～7章では、イエス様が大切なお話しをされています。イエス様のお話の中には私たちが「うーん」と考えさせられるお話もありますね。それは、イエス様が今までと違う新しいことを教えてくださる時です。

イエス様の時代、多くの人は昔から「隣り人を愛し、敵を憎め」と命じられてきました。「敵を憎め」と命じられなくても、敵に対して怒りや嫌な思いが湧いて来ませんか？ もし、「美味しい物を食べたら『美味しい』と言いなさい」という命令があったら、皆さんは難しく感じますか？ 感じないでしょう。ですから、「敵を憎め」とは誰にでもできる当たり前のことでした。

しかし、イエス様は「敵を愛し、迫害する者のために祈れ」と言われました。これは、今まで聞いたことのない教えでした。イエス様は、新しい教えを通して私たちを新しい恵みの世界に招き入れてくださるお方です。

新しい恵みの実践 祈り

「あそこのラーメン屋、めっちゃウマイでー！」と言われても、その店でラーメンを食べなければ美味しさを

体験することができません。イエス様の新しい恵みも、ただ聞くだけでなく実践することが大切です。

イエス様は「敵を愛し、迫害する者のために祈れ」と言われました。敵（嫌な人）のために祈ることと憎むこと、どっちが簡単ですか？ 感情に心を任せると、憎むほうに流れてしまうでしょう。しかし、人を憎み続けることは、憎み続ける相手に支配されることになってしまいます。

それは、憎んでいる相手に心が奪われるだけではなく、憎しみの感情は心を疲れさせるからです。

イエス様が「敵のために祈りなさい」というのは、その憎しみを我慢しなさいということではありません。憎しみの感情をそのままイエス様に正直に話すことです。憎しみを持ち続けず、イエス様のところに行き、手放すことが大切です。

話すは「放す」とも言われます。祈りを通してイエス様に心の内をすべて話すことで、抱えている思いがはなれていくのです。

皆さんの中には、憎しみだけでなく何か面白くない気持ち、感情はありますか？ イエス様に祈りましょう。

### 新しい恵みの実践 具体的な関わり

イエス様は「天の父は、悪い者の上にも良い者の上にも、太陽をのぼらせ、正しい者にも正しくない者にも、雨を降らして下さるからである」と言われました。父なる神様は、悪い者は愛されないと一方ではありません。すべての人に公平なお方です。ですから、イエス様は「敵のために祈り愛しなさい。親切に関わりなさい」と言われるのです。

このようなことは私たちには出来ません。でも、イエス様の助けを受けて新しい恵みに生かされていくなら、イエス様がそれをして下さいます。

### まとめ

私たちの周りには心が憎しみや怒りでいっぱい、愛することができない人たちもいます。

皆さんがイエス様の新しい恵みを体験し、イエス様の愛が皆さんから流れて伝わりますように。

♪イエスさまのみそばに♪（ホ80）

# 聖書 ガラテヤ5・16～26 テーマ 御霊の実

## 序論

(高橋頼男)

キリストの救いを受けた者が目指すべき目標は、救いの成長でありキリスト信仰の円熟です。「ついに、私たちがみな、…完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身だけにまで達するためです」(エペソ4・13、新改訳)とあるように、私たちがキリストの身だけにまで成長し、おとなになることです。その実質は御霊の実を結び身につけることです。そして、それを可能にしてくださるのはご聖霊です。キリストのからだである教会の交わりと奉仕を通して、キリストにある者の人格に麗しい徳と品性の実を結ばせてくださるのはご聖霊のお働きによるのです。これらは「御霊の実」と言われています。私たちは律法や人間の修養や努力で、外から内を造ることによってこれらのものを身に付けることは出来ません。御霊は律法とは反対に、内から外に向かってふさわしいかたちを生み出されます。命ある植物は自然に花を咲かせ実を結んでいきます。自分の弱さや罪深さを知ら

される度に神の御前に出て悔い改め、一つ一つ決断をもつてご聖霊に明け渡して委ね、御霊の導きに従い続けていくのです。そのような日々の歩みにおいて、私たちの内と生活の中に時が来れば麗しい実が結ばれていくのです(詩篇1・3)。異教と偶像の国である日本において、キリストの証人として伝道しようとするとき、キリストの信仰が私たちの人格や品性にまで及ぶのでなければ説得力のある働きを続けることが出来ません。人々は、キリストが神であることが分からなくても、その人が本物のキリスト信仰を持っているかどうかについては見抜く力を持っています。また、多くの場合日本人は人を通して神を見ます。そして、神につまりずく前に人につまずいてしまうのです。人を見ずに神を見て下さいねということと自体がつまりずきにしかありません。

ここには九つの「実」が出てきます。そして、それらは三つのグループに分けられます。

## 一、愛、喜び、平和(22)

これらは、神の前に私たちの内に結ばれる聖霊の実の現れです。神に愛されていることを知って神を愛し、神を喜び神に喜ばれるものとなり、神との平和が確立され

て平安に溢れ、私たちの生活に愛、喜び、平和（平安）の実が結ばれていきます。みことばと祈りを通して、聖霊による神との豊かな交わりに進みましましょう。

## 二、寛容、慈愛、善意（22）

これらは、人と人との関係の中で私たちの内に結ばれる御霊の実の現れです。罪深い人間にとって人間関係はなかなか厄介で面倒です。しかし、私たちはキリストの体の一肢体として召されていることを覚え、他の肢体との係わりの中に生きることが大切です。キリストにある人間関係、神の家族とされた人々は、私たちが選んだ好きな人、居心地の良い人、愛しやすい人ではありません。神が私に押し付けられた人たちです。彼らと積極的にかかわりを持ち、交わり、共に奉仕に与りましょう。そこで、彼らに教えられ励まされ、主にある忍耐を学び、赦される幸い赦すことの自由と解放を身につけていくのです。傷つけられた人が本当に癒されるのは、傷つけた人によつてです。キリストの共同体の中で聖霊により頼みつつ、キリストの愛を具現化、現実化させていただきましましょう。

## 三、忠実、柔和、自制（22・23）

これらは、自分自身に結ばれてくる御霊の実の現れで

す。教えられやすく柔らかな服従に満ちたところこそ柔和です。終わりの時代は、自己中心で欲望追及の時代です。欲望にすぐ手が届く環境（インターネット等）がそこにあります。何につけても、セルフコントロールが決め手です。欲望にかられてしまう自己を制する自制、節制、ブレーキの利く御霊の人の特徴を備えさせていただきます。ましよう。

これら九つのものは単数の「実」と言う言葉でまとめられています。つまり、これらはただ一つの「御霊の実」なのです。これらの御霊の実の諸相は、どれもみなキリストのうちに見られるものです。そして、キリストが御霊に満ちて歩まれたように、私たちもまた御霊のご支配を受け、御霊に導かれて歩む中に御霊の実が結ばれていくのです。神の前に、人間関係の中で、自分自身との付き合いにおいて、御霊に導かれ、御霊によつて歩み、御霊によつて進みましよう。

## 結論

聖霊の導きの中に生き、神との交わりの中で、御霊の実を結ぶ歩みをしていきましょう。

## 研究資料

(宮澤清志)

## テキスト

16～17 御霊によって 佐竹明は、この個所を「霊の指揮下に」と訳している。「御霊」とは、「御子の霊」(4・6)である。「御霊によって」とは、御霊に支配された生活、自らを御霊の指揮下においた生活のことであり、御子の霊である聖霊に自らの全権をゆだねた生活、という意味であろう。また、**歩きなさい** とは、歩み続けるという継続の意味を持っている。**肉の欲** 「肉」とは、単なる「肉欲」ではない。肉とは、神から離れた人間の自己中心性と、そこから生じる具体的行動の原動力である。このような自己中心から生じる欲望は、御霊による生き方と対立する。「御霊」と「肉」とは互いに逆らいう行動原理なのである。

18 **律法の下** ここでの「律法」は「モーセの律法」というよりも、人間を縛る法則性、掟の代表としての「律法」であり、そのようなものにがんじがらめにされた人間の状態を意味する。人間は、「御霊に導かれる」時にのみ、この律法から解放され、自由にされることができ

のである。そしてこの自由は、キリストが私たちに与えてくださったものである(5・1)。

19 ここから21節までで、パウロは、肉の支配下で生じる生活の実際的な結果が列挙されている。このような個所は、他にはローマ1・29～31、Iコリント5・10～11等に述べられている。**不品行、汚れ、好色** この3つの悪徳は、性的な罪のリストである。昔も今も、性生活の乱れは目を覆うばかりだったのであるうか。この3つの項目については、明確な線引きはなかなか難しい。

20～21 **偶像礼拝、まじない** この2つのリストは、異教的な罪についての指摘である。**敵意、争い、そねみ、怒り、党派心、分裂、分派、ねたみ** 以上の8つのリストは道徳上の罪ということが出来る。これらの罪は、共同体の成立を根底から破壊する罪である。特に、最後の**ねたみ** はこれらの罪の総括的な位置づけであって、26節の結びの部分にも登場することから、パウロはガラテヤの諸教会の問題点を「ねたみ」に見ていることもうかがえる。また、これらの罪はすべて自己中心から由来する罪であることも特徴的なことである。**泥酔、宴楽** この2つの罪は、不摂生の罪としてあげられる。以前も

言ったように 第2回目のガラテヤ訪問の時(使徒18・23)であると思われる。**神の国をつぐことがない** 神の国の相続人(3・29)であるキリスト者は、これまで述べられてきた肉の行いから決別していなければならない(24)。

22〜23 以上の悪徳リストに引き続き、「御霊の実」のリストが語られる。肉の働き(19)の「働き」が複数形であるのに対して、「御霊の実」の「実」は単数形で書かれている。聖霊は、ある人には愛を、また別の人には喜びを、という実を与えられるのではない。御霊の実は一つであり、そしてこれから語られる徳目は一つひとつ切り離されるのではない。**愛** パウロがこの言葉を御霊の実の筆頭にあげたことに異議はない。Iコリント13章をはじめ、この書簡でも、人間に対するキリストの愛(2・20)、人間自身の愛(5・6)としても描かれている。**喜び、平和** この2つは人間の感情的なものと受け止められやすいが、これらは聖霊によって与えられる賜物である。**寛容** この語は「辛抱強さ・忍耐強さ」という感じを含んだ言葉である。**忠実**(ギ)ピステイス 人間の神に対する信仰という意味に訳される。しかし、この徳が

人間に向くならば、それは「誠実・忠実」という意味になる。**これらを否定する律法はない** 御霊によって歩む者の行いである「御霊の実」は、律法が要求したものと結果的には合致する。

24 **キリスト・イエスに属する者** キリストと共に死に、キリストと共によみがえらされた者を指す言葉であって(ローマ6・3〜11)、キリストがわたしに居り、わたしがキリストに居ると告白する者(ヨハネ15・4)である。**十字架につけてしまった** ここで用いられている動詞は、過去の成就された行動を指し示す言葉であり、回心、もしくはバプテスマの時を指すものと見られる。

25〜26 **もしわたしたちが御霊によって生きるのなら** わたしたちは御霊によって生きているのだから、という意味。**御霊によって進(む)** 「進む」とは、規則に従って、まっすぐに進む、という意味であり、御霊の原理に従ってまっすぐに行動する、ということを目指す。「生きる」が御霊の原理を指す言葉であるのに対して、「進む」とは具体的な行動を指している。

**参考図書** 佐竹明「ガラテヤ人への手紙」(現代新約注解全書)、藤原藤男「ガラテヤ書の研究」(聖書の研究社)



## 聖書

ガラテヤ5・16～26

## タイトル

御霊の実

## 暗唱聖句

御霊の実は、愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制であって、これらを否定する律法はない。

ガラテヤ5・22～23

## 目標

御霊の実を結ぶ者となる。

## 導入

(後藤 真)

今日はペンテコステ。聖霊降臨日ともいいます。聖霊がくだってきた日という意味です。十字架にかかり、よみがえられたイエス様はもういちど来られることと、代わりに聖霊を送ってくださることを約束してくださいました。弟子たちやイエス様を信じる仲間たちは、イエス様を天に送って十日間、心を合わせていっしょうけんめいお祈りをしました。

そして、五旬節の日、約束どおり聖霊がくだります。おくびようだった弟子たちは勇気をもってイエス様のことを伝えます。そして教会が生まれました。教会といっても礼拝堂はありません。何人かずつが家に集まり、イ

エス様の教えを聞いたり、いっしょにお祈りをしたり、食事をしたりしていたのが教会のはじまりでした。聖霊は、わたしたちにイエス様を伝える力をくださいます。そして聖霊はイエス様を信じる人を集め、交わりをつくり、教会を生みだすのです。

## 御霊によって歩く

きょうの聖書は「御霊によって歩きなさい」ということばから始まっています。御霊と言うのは、聖霊のことです。御霊によって歩くとは、聖霊に導かれて生きることです。聖霊は、イエス様の代わりに来てくださいました。聖霊に導いていただくことは、イエス様に導いていただくことと同じです。

どうすれば聖霊に導いていただくことができるでしょうか。お祈りしていたら、急に聖霊の声が聞こえてきて、「今日は白いシャツを着なさい」とか「昼ごはんにはカレーを食べなさい」とか教えてもらえるのでしょうか。聖霊に導かれるなら、勉強しなくても試験の答えが分かかったり、話したことがない外国語が急に話せるようになるのでしょうか。

そういうことはありません。聖霊によって歩むとい

うのは、いつもイエス様の思いに従って生活することです。どうすればイエス様が喜ばれるかなあと、聖書を読んで考え、教会に来て教えてもらい、他の人をお手本にしてみることです。

わたしたちには肉があります。肉と言っても、焼肉にするおいしいお肉のことではありません。わたしたちの中に「自分さえ良ければいい」「イエス様を喜ばせるよりも自分が楽しいことをしたい」「イエス様なんて関係ないよ」と思わせる力のことです。

この肉の力はとても強いものです。わたしたちは、イエス様を喜ばせたいと思っているはずなのに、気づいたら嘘をついたり、けんかしたり、他の人を押しつけてでもお菓子を取ろうとしたりします。わたしたちが肉の力から自由になり、イエス様を喜ばせる生活ができるように、聖霊は助けてくださるのです。

### 御霊の実

わたしたちが、聖霊に助けていた দিয়ে、御霊によって歩くとき、御霊の実を結ぶことができます。実を結ぶというのですから、そのときだけちょっと頑張るというよりも、わたしたちが内側から変えられ、新しい人にな

るということです。今日のみことばには、たくさんの御霊の実が出てきました。愛、喜び、平和は、イエス様を愛し、親しくして生きること。寛容、慈愛、善意、は相手のことを考える優しい人として生きること。忠実、柔和、自制は、自分をいちばんにする思いをおさめ、イエス様のことばに従って生きることです。

御霊の実は、わたしたちが立派になり、他の人よりも偉くなるために結ばれるものではありません。へりくだって他の人に仕えるためです。わたしたちが御霊の実を結び、まわりの人に優しく親切に仕えることで、イエス様が証しされます。口で説明するよりも行いに表すほうが、イエス様の愛がよく伝わります。また、たがいに愛しあい、仕えあうとき、教会は暖かい集まりになります。そんな教会なら、新しい人も行ってみたくなるでしょう。ペンテコステの日にくだった聖霊は、今日もわたしたちを導いてくださいます。聖霊にたより、聖霊の実を結ばせていただきますよう。

♪イエスは愛で満たす♪ (新聖歌 208)

# 聖書 マタイ6・7・13 テーマ 主の祈り

## 序論

(金井信生)

「主の祈り」は、イエスが弟子たちに教えられた祈りのお手本です。前半は神に関して、後半は私たちの必要に関して、いずれも常におぼえて祈るべきことが教えられています。

## 一、呼びかけ

〈天にいますわれらの父よ〉との呼びかけは、私たちがいつも、神を意識した生活を送る土台です。〈天〉は、目に見えなくても、どこでも、どんな状況でも仰ぐことのできる神のおられるところです。また〈われら〉とあるのは、主の祈りが個人的ではなく、神を父と呼ぶことの許された教会の、共同の祈りであることを示します。

〈父〉と子は、命の関係です。祈りは呼吸であるとも言われますが、「天の父よ」と呼ぶことに命が吹き込まれます。また父と子との関係は人生の初めから存在するものですから、この呼びかけは帰ってきた者の告白というこ

ともできます。

## 二、神の栄光を求めて祈る

呼びかけに続く第一の祈りは、神の栄光が現れるように求める祈りです。〈御名〉とは、神ご自身の性質と力であり、神が神であることをまず告白します。そして、もし忘れて背いていれば悔い改め、神の守りと助けを必要としていることをおぼえてへりくだるのです。

第二は、〈御国〉を求める祈りです。〈御国〉とは、神が愛をもって導き守り、祝福される世界です。人間の力によって建てられるものではなく、上からの救いであり、地上と人性のすべての問題が解決されることです。この世界は、目に見えない、人の心の中に、そして交わりの中に生まれ、目に見える形で表されていきます。そして、世の終わりに永遠の御国が完成することを聖書は約束しています。

第三の祈りは〈みこころ〉を求める祈りです。〈御国〉が目に見える領域ではないのは、そこが〈みこころ〉が行われるところだからです。〈天〉において行われている〈みこころ〉が地において満たされていないのは、人

間の罪の現実があるからです。

神の造られた世界を、〈みこころ〉に従って治める務めが人間には与えられています。これに背いて世界を乱してしまいました。キリストの救いにあずかった者は、聖書を通して〈みこころ〉を知り、〈御国〉の民の一人として、互いに協力して〈御国〉が家庭にも職場や学校、地域にも実現していくように努める使命があります。

### 三、霊と心と体の必要のために祈る

人間についての第一の祈りは、体の求める必要です。「何を食べようか、何を着ようかと思わずらうな」と、神はわたしたちの必要を知っておられます。その上で、求め、与えられる関係の中で、神との交わりに感謝と喜びがあふれてくるのです。

また「あれが食べたい、これが欲しい」ではなく、自分にとって最善のものを神が備えてくださっている信頼も込めての祈りです。

次に、〈負債をもおゆるしください〉とは、心にとがめのある罪のことです。どんなに自分の過ちについて、おわびをし、償いをして、神の前にゆるされた喜びと確

信がなければ、いつまでも不安と恐れは心から去りません。十字架の救いを確信して祈りましょう。

神にゆるされた幸いは、人をゆるすことによって、なお恵みが深くなります。わたしたちが人の罪をゆるすとき、神がわたしをゆるすためにどれほどの忍耐と犠牲を払ってくださったかがわかります。そして人をゆるすことのできる自分に変えられたことに、なお主の救いの豊かさをおぼえるのです。

最後は、霊が守られることを求める祈りです。試練や誘惑は、わたしたちに神に対する不信や疑いを植え付け、神との交わりから遠ざけようとしています。〈悪しき者〉には人間の知識や努力では勝てません。戦いがあることを覚悟し、油断しないことと共に、主イエスがわたしを守ってくださる信仰に立ち、信頼して委ねることです。

### 結論

「主の祈り」は、わたしたちの祈りの基本です。一つ一つの言葉に、自分の思いを込めて、主との交わりを喜びましょう。

## 研究資料

(小平徳行)

ここは「主の祈り」と呼ばれ、イエスが祈りの態度と祈るべき内容について教えている所である。私たちはこの祈りをささげるだけでなく、意味を味わいつつ、日々の生活において、自分の信仰として歩みたい。主の祈りの前半は神に関するもので、後半は人の必要に関するものである。この順序は大切である。

## テキスト

7-8 ここでイエスは熱心な祈りを否定されたのではなく、無意味なくり返しは不必要であることを言われた。父なる神は私たちの必要はご存じであるから、信頼を持って祈るべきことを教えている。

9 父(ギ)パテル アラム語では「アバ」であり、幼児が父親に話しかける時の言葉。神に対して最も深い親しみを表す「アバ」という言葉をもって祈るように教えたのはイエスが初めてであった。神は恵み深い父親として一人一人に限りない愛と関心を持ち、喜んでその祈りを聴こうとしているお方である(マタイ7:11)。われらの主の祈りは個人の祈りだけでなく教会の祈りでも

ある。従って、この祈りは神の家族をとりなしの祈りと配慮をもって愛することを教えている。御名があがめられますように これは最も重要で基本的な求めであり、信仰生活の秘訣である。御名 神の本質、権威、立場などあらゆる面を含めた「神ご自身」を指す。あがめ(る)(ギ)ハギアゾー は「聖別する」の意。したがってこれは、神が全被造物から区別され、全世界が神を尊び、賛美し、礼拝し、感謝するようにという求めである。

10 御国がきますように キリスト者は、やがて来る神の国の先取りとして、現在、キリストの豊かな支配を味わっている。この祈りは神の支配が自分自身のうちに拡大されること、そして宣教の進展により、人々が回心すること、さらにキリストが再臨され、天の御国が完成することを求める祈りである。みこころが行われますように 地上で起こるすべての事柄が、神の望み通りに運ぶようにとの願いである。私たちは、自分を捨てずには、神のみこころを行うことを真剣に求めることはできない。これは従順を学ぶ祈りであり、イエスのゲッセマネの祈りにも共通する。ここまでの神に関わる祈りは、人の生き方を根本的に変えてしまう。この祈りを真実にさ

さげるためには、祈りの一つ一つに「私のうちに、私を通して」と付け加え、自らを神にささげるべきである。

11 わたしたちの日ごとの食物を、きょうもお与えください 私たちはこの祈りにおいて、自分のいのちと全宇宙が神に支えられていることを覚えることが大切である。物質的な必要のために祈ることは自らが神に依存していることを認め、神をあがめることになるのである。日ごとの食物 その日、その日に必要な食物。かつて神はご自身の民のために、荒野で40年間マナを備えられ、毎日の必要を満たされた。ここでは食物に限らず、生活に必要なすべてを含んでいると考えてよい。神は霊的な必要と同様に物質的な必要も配慮してくださるお方である。

12 わたしたちに負債のある者をゆるしましたように、わたしたちの負債をおゆるしください。負債（ギ）オフェイレーマ）は借金に対して使われたが、次第に、神に対して負い目をもっているという意味で使われるようになった。他の福音書では、「罪」（ギ）ハマルティア）が使われている（ルカ11・4）。クリスチャンは信仰によって義と認められたが、なお罪の赦しを必要としている者である（ヨハネ13・10）。ゆるしましたように この動詞

の時は不定過去であり、すでに完全に赦し、もはや何のこだわりもないというニュアンスが込められている。イエスは他人の罪を赦すべきことを14・15節や、たとえば話でも語っている（マタイ18・21・35）。神の赦しの恵みを深く味わった者は他者の罪を赦すことができる。

13 わたしたちを試みに会わせないで、悪しき者から救いください 私たちがこの祈りをささげなければならぬのは、常に私たちが危険にさらされており（1ペテロ5・8）、罪や悪に対して弱く、自分の力や知恵で打ち勝つことはできないからである。これは自分の弱さを認め、救って下さる主に信頼する祈りである。

新改訳聖書の13節の最後には「国と力と栄えは、とこしえにあなたのものだからです。アーメン。」と記載されている。最古の写本ではこの句は欠けているが、初代教会は、主の祈りを公の礼拝にふさわしく整えるため、かなり早い時期にこの頌栄を付け加えた。私たちが祈り求めるのは主の御力に根拠があるためである。

参考図書 中澤啓介『マタイの福音書註解（上）』（いのちのことば社）、J・I・パッカー『私たちの主の祈り』（いのちのことば社）他



## 聖書

マタイ6・7～13

## タイトル

喜んで主の祈りをささげよう！

## 暗唱聖句

御国が来ますように。みこころが天に行われるとおり、地にも行われますように。

マタイ6・10

## 目標

意味を知って「主の祈り」をささげる者となる。

## 導入

(飯田勝彦)

皆さんは「苦しいときの神頼み」という言葉を聞いたことがありますか？ 困難なことがあったときだけ神様を頼りにするという身勝手さを表した言葉です。

私たちは「苦しいときの神頼み」ではなく、毎日、神様を頼りにしているでしょう。頼りにしている人は、祈る人です。祈りとは、神様との会話です。

皆さんは、お母さんと会話するとき「ねえーご飯ちょうだい。おやつちょうだい。オモチャ買ってえ。服買ってえ。」とお願いばかりしていますか？ そんなことはないでしょう。学校で楽しかったことや、苦しかったことなどを話すでしょう。祈りとは、神様との親しい交わ

りです。

今日は、祈りについて一緒に考えましょう。

## イエスが教えてくださった祈り

教会の礼拝では、毎回「主の祈り」が唱えられますね。皆さんの中には、毎日唱えている人もいるかも知れませんが、「主の祈り」は、実はイエスさまが教えてくださった祈りなのです。

イエス様はある時、弟子たちに祈りの心得を教えてくださいました。

- ①人に気に入られるために恰好をつけた祈りをしない。
- ②父なる神様の前に独りになって祈る。
- ③くどくど祈らない。

「祈りは苦手です」という人がいます。何か特別なイメージを持っているのでしょうか？ 祈りとは、ありのままの姿で神様の前に出て、素直な気持ちを率直に伝えれば良いのです。「神様、今日は学校で嫌なことがありました。ぼくの心を守ってください」「神様、おばあちゃんが入院します。早く元気になるようにしてください」「教会の先生が忙しくしています。先生の健康を支えてください」。このような祈りは、シンプルな祈りで神様

は喜んで聞いてくださいます。イエス様は、主の祈りを通して身近に神様と親しめるようにしてくださいました。

突然ですが、愛とは何ですか? 「寛容、情深い、ね

たまない、高ぶらない」です。愛の中には、いろいろな素晴らしいものが含まれています。そのように主の祈りも「賛美、みこころの実現、必要のため、悔い改め、守り」が含まれています。祈りとは神様への「お願い」だけではないことが分かります。

①賛美「天にいますわれらの父よ、御名があがめられますように」

神様を賛美することも祈りなのです。皆さんは、よく賛美をしているでしょう。賛美を神様が祈りとして受け止めくださり、喜ばれるのです。

②みこころの実現「御国がきますように。みこころが天に行われるとおり、地にも行われますように。」

神様は私たちを素晴らしい恵みによって支配しようと願っています。その神様のみこころが私や世界になされるように祈りましょう。

③必要のために「わたしたちの目ごとの食物を、きょう

もお与えください。」

毎日、食事ができることは当たり前ではありません。それは神様が私たちの必要を知っていてくださるからです。

④悔い改め「わたしたちに負債のある者をゆるしましたように、わたしたちの負債をもおゆるしくください。」

イエス様は「敵を赦し祈りなさい」と言われました。祈りは赦し愛する力を与えてくれます。また、自分が罪を犯したなら素直に神様に悔い改めましょう。

⑤守り「わたしたちを試みに会わせしないで、悪しき者からお救いください。」

私たちの周りにはたくさん誘惑があります。それらから守られるように祈りましょう。

### まとめ

イエス様は私たちが祈りを通して神様にいろいろなことを話ができるように主の祈りを教えてくださいました。神様と関わると、心がさらに豊かにされます。

♪3つのやくそく♪ (ホ120、イン50)

# 聖書 マタイ7・1～5 テーマ 人をさばくな

## 序論

(小泉 創)

イエス様は山上の説教の中で、弟子たちに多くのことを教えてくださいました。その中に偽善者という言葉が繰り返し出てきます。つまり表面的な姿と、中身とが異なっている人物のことです。さも自分が良い人物であるかのようにふるまっていますが、内面はそうではないのです。この個所では、互いの人間関係の中で、「さばく」とについて取り上げています。「さばく」とは、ここでは「人を自分の尺度で判断したり、決めつけたりすること」と言い換えることができます。

## 一、さばいてはならない(2)

あなたは誰か<sup>だれ</sup>をさばいたことがありますか。

私が子どものころ、家に匿名で苦情の電話がかかってきたことがあります。そもそものは自分たちに落ち度があったことなのですが、とても不安な気持ちになりました。近所の人だということはわかったので、電話をかけたきたのはあの人だろうか、と疑心暗鬼になりました。

そういう目で始めると、全部怪しく思えて、その人が笑っているのを見ても、心が波だったものです。ところが、ある時、電話の主がだれであるかが分かったのです。私の予想は全くはずれていました。関係のない人に嫌なまなざしを送っていた苦い思い出が残りました。人は他の人をどれだけ正しく理解できるのでしょうか。知らぬ間に色眼鏡をかけて人を見てしまっていて、わかっているつもり、正しく判断しているつもりでいながら、実はまったく誤りであった、ということだっただけにあり得ます。そして反対の立場から考えると、自分に批判的な人だとわかると、その人に対しても内心穏やかではありえず、いつしか互いにさばきあうことになるかもしれません。人をさばくということは、自分もまたさばかれることを意味しています。ですから、イエス様は人をさばくなどおっしゃいました。

## 二、ちりと梁(3、4)

ひよっとしたら、私たちがほかの人の目の中の「ちり(おがくず・新改訳)」のように些細なことでさえも気になるのは、他の人の中に、自分の嫌な所と同じものを見ているからかもしれません。イエス様はユーモラスに語って

おられます。他の人の目の中にあるちりが気になって仕方がないあなたの目には、梁（丸太・新改訳）が入っているのではないか！ まずその梁を何とかしなさい！と。私たちの心に、自分のことを棚にあげて他の人のことばかり気になるような偏見があり、自分は偉いと思うような高ぶりがありはしないでしょうか。誤った判断に陥らないために、自分がまず神の御前に取り扱っていたかなければなりません。

私たちは時に二つのはかりを使い分けやすいものです。一つはあまり好意をいだいていない人をはかるための厳しいはかり、もう一つは、自分を含めて、好意をもっている人のための、ゆるいはかり。しかし、神の御前では、誰しもが公平に評価されるはずなのです。

### 三、神の御前で、磨きあう（5）

イエス様は、欠けのある私たちには、他の人のどんなことにも、目をつぶるべきだとおっしゃっているのでしょうか。当たり障りのない表面的な関係を築くことが、神様のみこころなのでしょう。イエス様は、（まず自分の目から梁を取りのけるがよい。そうすれば、はっきり見えるようになって、兄弟の目からちりを取りのけ

ることができるだろう）とおっしゃいました。取りのける必要はない、とはおっしゃっていません。

偽善者よ、というイエス様の言葉は、実は不親切な批判なのに、親切さを装っていることを指しているのかもしれない。でも、本当に親切からくる批判はどうでしょうか。あなたに時に厳しく忠告してくれる友があれば、それは何にも代えがたい宝です（箴言27・5）。

愛による勧告は、聖書の中で勧められています。その人のためにとりなし祈って、愛に根差していなければ、本当の勧告にはなりえないでしょう。けれども欠けのある私たちは、共に神の御前に立ち、磨きあうためにも互いを必要としているのです。

### 結論

神の面前におそれたずむしかないような自分が人を裁くとは、何と恐れ多いことでしょう。けれども必要な時には愛によって互いの間違いを指摘する言葉を語り、喜ぶ者としてください、と祈ってまいりましょう。

## 研究資料

(辻林和己)

マタイによる福音書5章から7章までは、「山上の説教」と呼ばれている個所である。山に登られた主イエスは、弟子たちと群衆に向かつて語られる。5・17から6・34まで、主イエスは律法学者、パリサイ派を批判しつつ、ご自身の律法、善行、この世の富に関する教えを語られた。7章は、天の御国の民とされた者たちの生活態度や神のさばきを覚えて生きることを語られる。

## テキスト

1 人をさばくな(ギ)メー・クリステ)は現在形命令法で、習慣として人のあら捜しを好んですることを禁じている。ここでの「さばく」(ギ)クリノー)は、「非難する」「咎める」の意味。裁判所の裁判の「さばき」のことではない。ここでは特に「人を自分の尺度で判断したり、決めつけたりすること」を意味している。ヤコブ4・11の「自分の兄弟をさばいたりする者」と4・12の「隣り人をさばくあなた」の原文では両方とも同じ動詞の分詞形が使われている。

2 さばかれ 他人を批判する基準に従って自分も評価される。当人が誰<sup>だれ</sup>によって「さばかれる」のかは明示されていない。究極的には神によってそれがなされる。量り与えられる 原文では動詞「量る」(ギ)メトレオー)の未来形受動態が用いられている。新改訳では「量られる」と訳されている。

3 人を批判する心の矛盾を、主イエスはたとえを用いて指摘される(3〜5)。この箇所のとえは、主イエスが宣教を始められる前に就いておられた職業、大工の仕事が反映していると思われる(マタイ13・55、マルコ6・3)。兄弟 肉親の兄弟ではなく、ここでは「同民族に属する仲間」「隣人」「信仰上の兄弟」を意味している。

ちり (ギ)カルフォス)は微小な乾いた木片。新共同訳では「おが屑」と訳されている。梁(ギ)ドコス)は木の横材。新共同訳では「丸太」と訳されている。ここでは、「梁」が人をさばくことが大きな過ちであることを示すシンボルとして用いられている。ちりと梁という余りにも大ききの違うものの対比は、他の人をさばくことがいかに理に合わないことを示す誇張法である。主イエスはここで誇張法を用いて、自分の大きな欠点を棚に上

げ、他の人の小さな欠点を暴き立てることが、いかに愚かなことかを人々に気づかせようとしておられる。

**4 自分の目には梁がある** 「もし、自分の中に梁があるなら…」ではなく、主イエスは、ここでの聴き手である弟子たちや群衆に対して、断定的にはっきり「あなたがたの目には梁がある」と仰っておられる。すべての人は、罪の下にあり、他の人をさばく思いがある（ローマ2・1、3・9参照）。**あなたの目からちりを取らせてください** 英語の「Let me」(「わたしに～させてください」)に似た表現。他人の欠点や過ちを指摘することのたとえ。

**5 偽善者** (ギ)ヒュポクリテース) はもともとギリシヤ古典劇の仮面芝居の俳優や役者のことであつた。主イエスはここでは弟子たちに対して言っておられる。主は、この言葉を、しばしば律法学者やパリサイ人たちに對して用いておられる(マタイ22・18、マルコ7・6等)。**まず自分の目から梁をとりのけるがよい** 「梁(丸太)」を「罪」と解釈すると、まず自分の内に罪があることを認め、それを取り除くことを意味する。しかし、自分の内に罪があること、自分の側に過ちがあることを認めて

も、自分の力で罪を取り除くことはできない。主イエスは聴き手に自分の内にある罪を自覚させようとした。私たちの梁(罪)を取り除くことができるのは、主イエスの十字架による贖い(あがな)によつてのみである。**はつきり見えるようになって** 「靈的な目」が開かれること。自分の罪が、主イエスによつて赦されたものは、自分の内の罪がさらにはつきりと見えてくる(分かつてくる)(ヨハネ9・41参照)。「人をさばくな」のみ言葉をいただいても、私たちは人をさばいてしまう罪人である。しかしそのような罪人を赦し、さらにきよめて下さる主の十字架の恵みを知る(ローマ5・12参照)。**兄弟の目からちりを取りのけることができる** 主の赦しと愛をいただいた兄弟同士は、互いにさばき合うのではなく、ゆるし合い、「互いに訓戒」することができるようになる(ローマ15・14参照)。

**参考図書** 増田誉雄「マタイの福音書」『新聖書注解』(いのちのことば社)、ラルフ・アール「マタイの福音書」『ウェスレアン聖書注解』(新教出版社) 他



## 聖書

マタイ7・1〜5

## タイトル

イエス様が教えられた大切な事

## 暗唱聖句

人をさばくな。自分がさばかれないためである。  
マタイ7・1

## 目標

人を裁かない者となる。

## 導入

(松浦みち子)

皆さんは、他の人を指して悪口を言ったことはありませんか？ 小さな、ちよつとしたことでも、他の人を指して、悪くいったり、非難してはダメです、とイエス様は教えられました。そのことをみことばから一緒に学び、自分にあてはめて考えてみましょう。

## 山上の教えのひとつ

ある時、イエス様の教えを聞こうとおおぜいの人々が押しかけてきた時、イエス様は山に登られ、腰をおろして、人々に語りかけられました。いろいろなお話をいっぱいされた中のひとつの教えです。「人をさばくな。自分がさばかれないためである」(マタイ7・1)。このことを考えるとき、皆さんに一つのポーズをとっていただくことにしましょう。それは、人を指すときのポーズで

す。人差し指をのばし、あとの指はグーをしますね。人差し指は相手を指しています。あとの指は全部自分のほうに向かっていますね。イエス様がおしやった教えは、このポーズのことです。他人を指して、悪口をいい、非難するとき、その何倍もの非難が自分に向けられていることを忘れないでね、ということです。イエス様は、「あなたがたがさばくそのさばきで、自分もさばかれ、あなたがたの量るそのはかりで、自分にも量り与えられるであらう」(マタイ7・2)と教えられたのです。私たちは人のことはよく見えますが、自分のことはよくわかりませんね。あなたは、他の人に「ほら、ほっぺにごはんつぶがついているよ」とか「ほら、墨がついているよ」と汚れを指摘されたことはありませんか？ 「あつ、ほんとだ！」と気づくことがありますね。だれでも、他の人のことはよく見えるのです。イエス様も、兄弟にむかって「ほら君の目にちりが付いているよ。取ってあげよう」と手をのばすくせに、自分の目には大きな梁があるのに気づかず、認めようとしれない、と言われました。これは、他人の欠点や、弱点にはよく気づくの、自分のうちにある罪には気づこうとしない姿を表しています。そ

して、他人より自分を優れた者と心の中で思っている姿です。

### 人は人をさばく資格がない

人間はどんなに偉い人でも、相手の全ての姿を知ることとはできません。よいとか悪いとかを本当にさばくことができるのは神様お一人です。なぜなら、たとい人前で悪口を言ったことも、陰で言ったことがなくても、心の中では、いろいろと人をののしったり、さげすんだり、憎んだりすることがあります。神様は私たちの心の思いの中ですべてをご存じです。神様の前に隠れる罪はありません。では、どうしたらこんないやな自分から離れることができるでしょうか。イエス様の十字架の血潮できよめていただく以外に方法はありません。伝道者パウロも、自分の中にひそむ罪に気づいて、「わたしの肉の内には、善なるものが宿っていないことを、わたしは知っている。なぜなら、善をしようとする意志は、自分にあるが、それをする力がないからである」（ローマ7・18）「わたしは、なんというみじめな人間のだろう。だが、この死のからだから、わたしを救ってくれるだろうか」（ローマ7・24）と叫んでいます。しかし、この叫び

に応えて、罪のからだから解放される方法がただ一つだけあるのです。それはイエス様の十字架です。私たちの罪を背負って死んで下さったイエス様の十字架を信じるとき、はじめて私たちは心の深みまで新たにされて、真の義と聖とをそなえた神にかたどって造られた新しい人に生まれ変われるのです（エペソ4・23～24）。なんとうれしいことでしょう。

### 人をさばかない生き方

人をさばかない生き方をするために、イエス様はお手本をお示しになりました。それは、苦しい十字架の上での祈りです。二人の犯罪人と一緒に十字架につけられたとき、イエス様はこう祈られました。「父よ、彼らをおゆるしてください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」（ルカ23・34）。私たちは誰もかれもが左右をわきまえず、何をしているのか分からずに生きているようなものです。自己中心な考えで、人をさばいたり、自分の物差しで行動する者です。私たちはイエス様の祈りを心にとめて、ゆるされた自分であることを感謝してイエス様の足跡に従っていきましよう。

♪神のお子のイエスさま♪（ホ74、ふ74）

# 牧羊ひろば



函館中央教会 教会学校

「この教会の子ども達は、本当に元気だね！」

初めて教会に来られた方や、久しぶりに来られた方が時々このように言われますが、本当に元気（ちょっとヤンチャ？）な子ども達の教会学校の様子をご紹介します。

## ●礼拝

函館中央教会は、一九八七年四月に開所式が行われ、伝道師と一家族だけの礼拝でスタートしました。教会学校も、子どもがいなくて中断した時期もありますが、今は毎週礼拝を守られている事を感謝します。

礼拝は、毎週日曜日十時から三十分間です。プログラムは、賛美、祈り、説教、献金、主の祈りです。賛美は、二ヶ月間同じ曲一曲を歌い続けます。毎礼拝で同じ曲を二回賛美しますから、さすがに二か月間同じ曲を歌い続けると、嫌でも憶えてしまいます。

ある子どものお母さんが、「娘が、教会学校に来ていないお友達と遊んでいる時、何気なく無意識に賛美を口ずさむので、そのお友達もいつの間にかすっかり覚えてしまい、一緒になって歌っていた」と、とても喜んでいました。子ども達の生活の中に自然と賛美が口からこぼれる、ズバリこれが狙いです。また、いつの間にか子ども達がMY聖書を持参するようになり、皆で一節ずつ順番に読みます。聖書を読む事も楽しいようで、今では聖書を開くのもすっかり早くなりました。そして、お話の中で教師の質問に、とても積極的に答えてくれます。時々、珍回答でお話の流れを元に戻すのに苦労しますが…。み言葉と賛美が子ども達の生活にしっかりと根づく事を願っています。

## ●分級

教師は二人いても、一人は礼拝奏楽者なため、残念ながら、分級は一人で担当することがあります。分級と言いつつも、実際は、三才から十二才までと年齢差がかなりありますが、皆一緒にワーク等をします。子ども達は、教師の手が足りないのを理解していて、年上の子が小さ

な子をよく助けてくれます。また、保護者の方もお手伝いをして下さり、感謝しています。

分級で特に力を入れているのは、暗唱聖句です。「楽しい楽しい暗唱聖句。み言葉は宝！」と言って、一年の内で十か月掛けて、一月に一つ目の聖句、二月は二つ目の聖句プラス一月の聖句という具合にひと月に新しい聖句を一つずつ憶えていき、段々増えて、十月末には約十個の聖句を憶えていることになります。子ども達は実に根気よく頑張っています。聖書箇所はなかなか憶えづらいですが、子ども達がアイデアを出してくれたり、四苦八苦したりしながらも、互いに励まし合い、楽しく憶えています。ヤンチャな子ども達も、この時はとても真剣に取り組んでいます。教会学校に付き添って参加している保護者の方々も、一緒に頑張って憶えています。やがてこのみ言葉が子ども達の中に蓄えられて、子ども達を助け導いて下さることを信じて、励んでいます。

## ●子ども祝福式

十か月掛けて憶えた聖句を、十一月の子ども祝福式で会衆の前に、皆で一緒に発表します。今年は、詩篇23篇

を暗唱し、ヘブル語でも一、二節を暗唱しました。これは、教会の皆様にも大変大きな励ましとなりました。牧師による祝福祈祷の後、プレゼントを受け取る子ども達の達成感と嬉しそうな笑顔が、本当に私たちにとってとても大きな喜びです。



子ども祝福式 賛美とみ言葉暗唱

## ●小学六年生卒業お祝い会

小学六年生卒業のお祝いを兼ねてのお楽しみ会で、巨

大すごろく作りをしました。会堂の椅子を片付けて床一面に段ボールを貼り合わせて、巨大すごろくを自分たちで作成し、お昼は教会員が作ってくれたハヤシライスが美味しく頂いた後、いよいよゲーム開始、罰ゲームでは大いに盛り上がりました。中学生になると教会へ来なくなる人が多い中、楽しい思い出作りをし、イエス様がいつも一緒にいて下さること、教会はいつも皆を待っていることを、胸に刻み込んで欲しいと願っています。



巨大すごろく作り

## ●誕生会ほか

その他、誕生会にカードとお菓子でのお祝い、敬老の日には、手作りカードをお渡しし、大変喜ばれました。イースター・エッグ作り、お菓子リース作り、アドベント・カレンダー作りと、子ども達が大活躍です。

花の日には、近所の交番と消防署にお花を届けましたが、お礼に消防車に乗せられたり、消防士服やホースに触れたり、とても有意義な時を過ごしました。

また、教会のお兄さんと一緒に大きなプリン、大きなババロア作りと、家では出来ない大きなシリーズも好評です。



花の日に消防署にて

## ●ハレルヤ・キッズ

教会学校に來られない子ども達のためには、クリスマス会と不定期のハレルヤ・キッズを行っています。

第一部は礼拝で賛美とショートメッセージ、第二部は楽しみ、というプログラムになっています。ケーキの



リース作り

デコレーション、お菓子バイキング、ジャンケン大会、ゲーム大会、綿あめ、ポップコーン、フラワーアレンジメント等、教会の皆様の助けをいただいております。人手不足でなかなか定期的にはできませんが、何とか継続出来たらと願っています。

## ●福音のためなら

教会行事のバーベキュー大会、クリスマス祝会、大掃



ハレルヤ・キッズ 綿あめ機の前で



除等への参加や、園芸部のご労によって教会庭の片隅の小さな畑。イチゴ、トマト、胡瓜等、ほんの少しですが、子ども達は礼拝後かごを持って収穫に行くのが楽しみとなっています。そして、愛餐で大人も子どもも皆で少しずつ分け合って頂くこともとても嬉しく思います。

しかし、毎週時間に追われ、子ども一人ひとりにじっくりと向き合えない、子ども達の声に耳を傾けていない状況に、問題も感じます。今後、これらの事にどう対処すべきか、主の助けと導きを祈っています。

今の時代、子どもが子どもらしく生きにくい時代、愛が冷えた時代、親から見捨てられる時代に、子どもたちが、独り子なる御子イエス様を救い主としてこの世にお送り下さり、愛を表して下さった神様を信じて従い、幸いな生涯を歩んで欲しいと、願って止みません。

小さな教会ですが、教会の皆様の祈りと愛の中で、温かく見守られていることの幸いを感謝しています。

「福音のためなら、わたしはどんなことでもします。それは、わたしが福音に共にあずかる者となるためです。」

(Ⅰコリント9・23 新共同訳)

(二宮友子)



クリスマス祝会

## 『牧羊者』のご購読・ご利用について

\* 分級用に、ワークA(幼稚園向け)、B(主に小学生1～3年生向け)、C(主に小学生4～6年生向け)を用意しています。また、付録として「子ども聖書日課」、「フラッシュカード」、「み言葉カード」、「中高科へのヒント」があります。いずれも、下記ホームページから無料でダウンロードできます。ご希望の方には、ワークは各600円+税でお送りします。  
信徒局 教会教育室 ホームページ  
<http://cs.jccj.info/>

\* ご注文は、日本イエス・キリスト教団(事務局)まで。申込み、部数変更等のための用紙も、上記ホームページからダウンロードできます。  
神戸市兵庫区塚本通3-3-19  
電話 (078) 575-5511  
FAX (078) 575-6611

## おわりに

『牧羊者』二〇一七年度第I巻をお届けできますことを感謝します。また、執筆者のご労苦に感謝いたします。教師養成講座は金井望師に「教会学校のリバイバルを求めて」を執筆していただきました。「牧羊ひろば」は函館中央教会のCSを紹介していただきました。今号の執筆者、奉仕者を紹介いたします。

### 前号の訂正

10ページ上段10行目「誤」山田春枝↓「正」山田晴枝

また、事務作業・発送の教団事務所の兄姉、印刷の松木共栄印刷、菱三印刷に心から感謝いたします。(中島啓一)

### 聖書教育教案誌 牧羊者

#### 二〇一七年度 I巻

二〇一七年四月一日発行

発行所 日本イエス・キリスト教団 信徒局 教会教育室  
企画監修 日本イエス・キリスト教団 信徒局 教会教育室

印刷所 菱三印刷株式会社  
電話 (078) 575-5511  
FAX (078) 575-5511  
電話 (078) 575-5511

\* 日本聖書協会「口語訳聖書」使用許諾済み

聖書講解	石田高保師	小泉 創師	高橋頼男師
研究資料	金井信生師	水川武志師	福井文彦師
	宮澤清志師	小平德行師	金井由嗣師
	辻林和己師	井上義実師	中島啓一師
メッセージ例	松浦みち子師	和田 治師	飯田勝彦師
	土屋開夫師	後藤 真師	
ワーク (A)	鎌野 幸師	吉田美穂師	佐川直実師
(B)	山下大喜師	三輪直子師	勝田幸恵師
	野勢かほる師		
(C)	上森恭子師	田中裕明師	勝田幸恵師
中高科へのヒント	後藤健一師	三輪正見師	石田高保師
子ども聖書日課	田中愛子師	金田ゆり師	小野淳子師
フラッシュカード	丹羽 遥姉	松浦あん姉	佐藤由香姉
	佐藤恵美姉	金田ゆり師	後藤栄子師
み言葉カード	丹羽 遥姉		
・イラスト			
ワープロ打ち込み	多田豊子師		
校正	長田栄一師	加藤 清師	山田和幸師
	中島啓一師		